HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日知録集釋卷一譯注
Author(s)	伊東, 倫厚
Citation	北海道大學文學部紀要, 38(3), 1-119
Issue Date	1990-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33555
Type	bulletin (article)
File Information	38(3)_PR1-119.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日知錄集釋卷一譯注

伊東倫厚

日知錄集釋卷一（據道光十四年仲冬嘉定黃氏西谿草廬重刊定本）

崑山顧炎武著　　嘉定後學黃汝成集釋

三易

夫子言包羲氏始畫八卦。不言作易。而曰。易之興也。其於中古乎。又曰。易之興也。其當殷之末世。周之盛德邪。當文王與紂之事邪。是文王所作之辭。始名爲易。而周官大卜。掌三易之法。一曰連山。二曰歸藏。三曰周易。連山歸藏非易也。而云三易者。後人因易之名以名之也。

〔雷氏曰〕伏羲畫卦。自兩儀生四象。而四時之序已著。自四象生八卦。而萬物之理悉函。自八卦重之。相錯相盪。陽動而進。左旋而位于西北。陰動而退。右轉而位于西南。于是震兌正于東西。坎離正于南北。而四時首春。帝出乎震之象以立。又以乾元用九消息之。而十二辟卦之象以成。六十四卦之象以著。伏羲氏之所以爲易者也。連

山者。神農氏之易也。神農詳于地。辨土性。藝五穀。嘗百藥。鑿井出泉。立市通貨。故其易用伏羲八卦之動象。以艮爲首。艮者。止也。止乃行之首。以時行爲義。由體達用之象也。艮本陽卦。其象爲山。位在東北。立春斗建之所在也。山托于地而親。上能出雲氣。和洽天地。且二山相襲。故曰連山。歸藏黃帝。杜子春之說。不可易。蓋黃帝之治。詳于人。作調[歷]以授時。作杵臼以前用。作舟車以致遠。作弧矢以取威。作衣冠宮室以庇身。作禮樂書契以立敎。上古朴野之俗。至此而變。後世文明之象。自此而開。易象曰。后以裁成天地之道。輔相天地之宜。以左右民。卽謂此矣。其後五帝之治。皆因于此。故伏羲爲天皇。神農爲地皇。黃帝爲人皇。此卽周官書之所謂三皇矣。黃帝在位百年。功成之後。深求道極。默契本原。于羲農之易。皆反而歸之。得其初象。知陽氣之所以能生。實原于此。于是以坤爲首。以陰爲主。以靜爲道。以柔爲用。所以明體也。

猶之墨子書言周之春秋。燕之春秋。宋之春秋。齊之春秋。周燕齊宋之史。非必皆春秋也。而云春秋者。因魯史之名以名之也。

〔汝成案〕雷氏用杜子春之說。以歸藏爲黃帝易。似矣。然禮運。孔子曰。我欲觀殷道。得坤乾焉。注以爲殷時陰陽之書。卽歸藏易。而鄭司農贊易。亦以爲歸藏殷易。釋其義曰。歸藏者。萬物莫不歸藏于中。夏曰連山。連山者。象山之出雲。連山不絕。周易者。言易道周普。无所不備。與杜子春說不同。大抵世代荒遠。莫可稽考。後人徒從推測得之。亦各存其說而已。

〈一〉 三易

夫子[1] 包羲氏始めて八卦を畫するを言ひ、易を作るを言はず。而して曰く、「易[2]の興るや、其れ中古に於けるか。」又

曰く、「易[3]の興るや、其れ殷の末世、周の盛德に當たるか。文王と紂との事に當たるか。」是れ文王の作る所の辭、始めて名づけて易と爲す。而して『周[4]官』大卜に、「三易の法を掌る。一に曰く連山、二に曰く歸藏、三に曰く周易。」連山・歸藏は、易に非ざるなり。而るに三易と云ふ者は、後人　易の名に因りて以て之を名づくるなり。

〔雷[5]氏曰く〕伏羲　卦を畫し、兩儀　四象を生じてより、四時の序已に著はれ、四象　八卦を生じてより、萬物の理悉く函す。八卦之を重ね、相錯し相盪してより、陽は動きて進み、左旋して西北に位し、陰は動きて退き、右轉して西南に位す。是において震兌　東西に正し、坎離　南北に正す。而して四時　春を首とし、帝　震に出づるの象以て成る。又乾元・用九を以て之を消息して、十二辟卦の象以て成り、六十四卦の象以て著はる。伏羲氏の、易を爲る所以の者なり。連山とは、神農氏の易なり。神農　地に詳かにして、土性を辨じ、五穀を藝ゑ、百藥を嘗め、井を鑿ち泉を出だし、市を立て貨を通ず。故に其の易　伏羲八卦の動象を用ひ、艮を以て首と爲す。艮は、止なり。止は乃ち行の首、時行を以て義と爲す。體由り用に達するの象なり。艮は本、陽卦、其の象　山と爲し、位　東北に在り、立春、斗建の在る所なり。山は地に托して親しみ、上能く雲氣を出だし、天地を和洽す。且つ二山相襲ぬ、故に連山と曰ふ。歸藏は黄帝、杜[6]子春の說、易ふべからず。蓋し黄帝の治、人に詳かなり。調歷を作りて以て時を授け、杵臼を作りて以て用を前め、舟車を作りて以て遠きを致し、弧矢を作りて以て威を取り、衣冠宮室を作りて以て身を庇ひ、禮樂書契を作りて以て教を立つ。上古の朴野の俗、此に至りて變じ、後世の文明の象、此れよりして開く。『易[7]』象に曰く、「后以て天地の道を裁成し、天地の宜を輔相し、以て民を左右す。」卽ち此れを謂ふ。其の後、五帝の治、皆此れに因る。故に伏羲を天皇と爲し、神農を地皇と爲し、黄帝を人皇と爲す。此れ卽ち『周[8]官書』の所謂三皇なり。黄帝　位に在ること百年、功成るの後、道極を探求し、本

原を默契す。羲農の易において、皆反りて之に歸し、其の初象を得、陽氣の能く生ずる所以、實に此に原づくを知る。是において坤を以て首と爲し、陰を以て主と爲し、靜を以て道と爲し、柔を以て用と爲す。體を明かにする所以なり。

猶ほ之れ『墨子書』[9]に、周の春秋・燕の春秋・宋の春秋・齊の春秋と言ふがごとし。周・燕・齊・宋の史、必ずしも皆春秋に非ざるなり。而るに春秋と云ふ者は、魯史の名に因りて以て之を名づくるなり。

〔汝成案ずるに〕雷氏　杜子春の說を用ひ、歸藏を以て黃帝の易と爲すは、似たり。然れども禮運[10]に、「孔子曰く、我　殷の道を觀んと欲す、坤乾を得たり。」注に以爲へらく、殷の時の陰陽の書、卽ち歸藏易、と。而して鄭司農[11]『易』に贊し、亦以爲へらく、歸藏は殷の易、と。其の義を釋して曰く、「歸藏とは、萬物　中に歸藏せざる莫し。夏には連山と曰ふ。連山とは、山の、雲を出だし、連山[12]絶へざるに象る。周易とは、易道　周普にして、備はらざる所无きを言ふ。」杜子春の說と同じからず。大抵、世代荒遠にして、稽考すべき莫し。後人　徒だ推測從り之を得、亦各〻其の說を存するのみ。

(1) 夫子言包羲氏始畫八卦　『周易』繫辭傳下「古者包犧氏之王天下也。仰則觀象於天。俯則觀法於地。觀鳥獸之文與地之宜。近取諸身。遠取諸物。於是始作八卦。以通神明之德。以類萬物之情。」

(2) 易之……古乎　『周易』繫辭傳下。

(3) 易之……事乎　『周易』繫辭傳下。

(4) 周官大卜　『周禮』春官、大卜。

(5) 雷氏　雷學淇『介庵經說』易、三易原始。引用に省略有り。

(6) 杜子春之說　『周禮』春官、大卜、鄭注「杜子春云。連山宓戲。歸藏黃帝。」

(7) 易象　泰卦大象。

(8) 周官書　『周禮』春官、外史。

(9) 墨子書　『墨子』明鬼下。

(10) 禮運　『禮記』禮運「我欲觀殷道。是故之宋。而不足徵也。吾得坤乾焉。」鄭注「得陰陽之書也。其書存者有歸藏。」

(11) 鄭司農　鄭衆・鄭玄ともに大司農となってはいるが、鄭司農と云えば專ら鄭衆を指すのが通例であるから、ここは當に鄭康成と書すべきところ。孔穎達『周易正義』序、第三論三代易名「鄭玄易贊及易論云。夏曰連山。殷曰歸藏。周曰周易。鄭玄又釋云。連山者。象山之出雲。連連不絶。歸藏者。萬物莫不歸藏於其中。周易者。言易道周普。无所不備。」

(12) 連山　當に「連連」と作るべきところ。

左傳僖十五年。戰於韓。卜徒父筮之。曰吉。其卦遇蠱。曰千乘三去。三去之餘。獲其雄狐。成十六年。戰於鄢陵。公筮之。史曰吉。其卦遇復。曰南國蹙。射其元王。中厥目。此皆不用周易。而別有引據之辭。卽所謂三易之法也。

〔原注〕卜徒父以卜人而掌此。猶周官之大卜。

而傳不言易。

〔楊氏曰〕其用周易處。必出周易之名于上。如有以周易見陳侯。及周易有之之類。

『左傳』[13] 僖十五年に、韓[14]に戰ひ、「卜徒父　之を筮し、吉[15]と曰ふ。其の卦　蠱に遇ふ。曰く、千乘三去す、三去の餘、其の雄狐を獲、と。」成[16]十六年に、鄢陵[17]に戰ひ、「公　之を筮し、史曰く吉。其の卦　復に遇ふ。曰く、南國蹙まる、其の元王を射て、厥の目に中たる、と。」此れ皆『周易』を用ひずして、別に引據の辭有り。卽ち所謂三易の法なり。

〔原注〕卜徒父　卜人を以てして此を掌る、猶ほ『周官』の大卜のごとし。

而して傳に易と言はず。

〔楊氏[18]曰く〕其の『周易』を用ふる處、必ず『周易』の名を上に出だす。『『周易[19]』を以て陳侯に見ゆる有り」、及び「『『周易[20]』に之有り」の類の如し。

(13) 左傳僖十五年　引用に省略有り。
(14) 戰於韓　『春秋』僖公十五年「十有一月壬戌。晉侯及秦伯戰于韓。獲晉侯。」
(15) 曰吉　原據には「曰」字無し。
(16) 成十六年　引用に省略有り。
(17) 戰於鄢陵　『春秋』成公十六年「晉侯及楚子鄭伯戰于鄢陵。楚子鄭師敗績。」
(18) 楊氏　楊名守。出典未詳。
(19) 有以周易見陳侯　『左傳』莊公二十二年。
(20) 周易有之　『左傳』宣公十二年・襄公二十八年・昭公二十九年。

重卦不始文王

大卜掌三易之法。其經卦皆八。其別皆六十有四。攷之左傳襄公九年。穆姜遷於東宮。筮之遇艮之隨。姜曰。是於周易。曰隨元亨利貞。无咎。獨言是於周易。則知夏商皆有此卦。而重八卦爲六十四者。不始於文王矣。

〔梁氏曰〕周本紀及世表。皆言文王益卦。其實非。孔氏易正義。論重卦之說。王弼以爲伏羲。以繫辭攷之。弼言爲當。十二卦體。已具于羲農黃帝堯舜之世。以洪範攷之。其七卜筮貞龜。已見于禹錫九疇之時。則可知爲伏羲因重之驗。

〈二〉　卦を重ぬるは文王に始まらず

「大卜[1]　三易の法を掌る。其の經卦皆八、其の別、皆六十有四。」之を『左傳[2]』襄公九年に攷ふるに、穆姜　東宮に遷り、之を筮して艮の、隨に之くに遇ふ。姜曰く、「是れ周易に於て、隨は元亨利貞、咎无し、と曰ふ。」獨り是れ周易に於てと言へば、則ち夏商、皆此の卦有り、而して八卦を重ねて六十四と爲す者、文王に始まらざるを知る。

〔梁氏[3]曰く〕周本紀及び世表、皆、文王　卦を益すを言ふも、其の實、非なり。孔氏[4]の『易正義』、卦を重ぬるの說を論じ、王弼以て伏羲と爲す。繫辭を以て之を攷ふるに、弼の言を當たれりと爲す。十二卦體、已に羲農黃帝堯舜の世に具はる。洪範[5]を以て之を攷ふるに、其七の卜筮の貞[6]斡、已に禹　九疇を錫はるの時に見ゆ。則ち伏羲因りて重ぬるの驗爲るを知るべし。

(1) 大卜……有四　『周禮』春官、大卜。

(2) 左傳襄公九年　穆姜薨於東宮。始往而筮之。遇艮之八。☳☶史曰。是謂艮之隨。☳☱隨其出也。君必速出。姜曰。亡。是於周易。曰隨元亨利貞。無咎。」

(3) 梁氏　梁玉繩『史記志疑』卷三。

(4) 孔氏易正義　孔穎達『周易正義』序、第二論重卦之人。

(5) 洪範　『尙書』洪範「七稽疑。擇建立卜筮人。乃命卜筮。曰雨。曰霽。曰蒙。曰驛。曰克。曰貞。曰悔。」

(6) 貞斡　『說文解字』三下、卜部「斡。易卦上體也。商書曰。曰貞。曰斡。」段注「今尙書左傳皆作悔。疑斡是壁中古文。孔安國以今文讀之。易爲悔也。」なお、貞斡の意味については、第五十二條を參照。

朱子周易本義

周易自伏羲畫卦。文王作彖辭。周公作爻辭。謂之經。經分上下二篇。孔子作十翼。謂之傳。傳分十篇。彖傳上下二篇。象傳上下二篇。繫辭傳上下二篇。文言。說卦傳。序卦傳。雜卦傳。各一篇。

〔原注〕漢書藝文志。易經十二篇。師古曰。上下經及十翼。故十二篇。孔氏正義曰。十翼者。上彖一。下彖二。上象三。下象四。上繫五。下繫六。文言七。說卦八。序卦九。雜卦十。陸德明釋文曰。太史公論六家要旨。引天下同歸而殊塗。一致而百慮。謂之易大傳。班固謂孔子晚而好易。讀之韋編三絕。而爲之傳。傳卽十翼也。前漢六經與傳皆別行。至後漢。諸儒始合經傳爲一。

自漢以來。爲費直鄭[元]王弼所亂。取孔子之言。逐條附於卦爻之下。

〔莊氏曰〕朱子發漢上易傳云。王弼以文言附于乾坤二卦。孔氏正義云。輔嗣之意。以爲象本釋經。宜相附近。其義易了。故分爻之象辭。各附其當爻下言之。按。此則費氏古經。自是經傳相別。其謂費氏始亂經者妄也。合彖象于經者。自康成始。則加彖曰象曰之文。猶以傳附經後。若今乾卦者是。是爲鄭氏本。至以象附爻。而以彖象移置爻前。自輔嗣始。則每爻加象曰之文。若今坤卦以下者是。又以文言附乾坤二卦。于坤亦加文言曰之文。是爲王氏本。

程正叔傳因之。及朱元晦本義。始依古文。故於周易上經條下云。中間頗爲諸儒所亂。近世晁氏始正其失。而未能盡合古文。呂氏又更定著爲經二卷傳十卷。乃復孔氏之舊云。洪武初頒五經天下儒學。而易兼用程朱。二氏亦各自爲書。永樂中修大全。乃取朱子卷次。割裂附之程傳之後。

〔原注〕易經大全凡例曰。程傳本義既已並行。而諸家定本又各不同。故今定從程傳元本。而本義仍以類從。

而朱子所定之古文。仍復殺亂。彖卽文王所繫之辭。傳者孔子所以釋經之辭也。後凡言傳放此。此乃彖上傳條下義。今乃削彖上傳三字。而附於大哉乾元之下。象者卦之上下兩象。及兩象之六爻。周公所繫之辭也。乃象上傳條下義。今乃削象上傳三字。而附於天行健之下。此篇申象傳象傳之意。以盡乾坤二卦之蘊。而餘卦之說。因可以例推云。乃文言條下義。今乃削文言二字。而附於元者善之長也之下。其彖曰。象曰。文言曰字。皆朱子本所無。復依程傳添入。後來士子厭程傳之多。棄去不讀。專用本義。

〔原注〕宏治三年會試。物不可以苟合而已。故受之以賁題。陳輔文。同考官楊守阯批曰。序卦朱子無一言以釋其義。蓋以程子於諸卦之首疏析其義。已明且盡故也。今治經者。專讀本義。易卷踰八百。而知有傳者不數人。此能知之而又善作。是用錄之。以激厲經生之不讀程傳者。

而大全之本。乃朝廷所頒。不敢輒改。遂卽監版傳義之本。刊去程傳。而以程之次序爲朱之次序。

〔原注〕虛齋蔡淸易經蒙引。謂之今所竊刊行易經本義。今四書版本。每張十八行。每行十七字。而注皆小字。書詩禮記並同。惟易每張二十二行。每行二十三字。而本義皆作大字。與各經不同。明爲後來所刻。是依監版傳義本。而刊去程傳。凡本義中言程傳備矣者。又添一傳曰。而引其文。皆今代人所爲也。坊刻擅改古書。宜有嚴禁。是學臣之責。朱子詩集傳序。蔡仲默書集傳序。今南京刊大全本。改曰詩經大全序。書經大全序。此卽亂刻古書之一驗。幸監本尙存。其謬亦易見爾。

相傳且二百年矣。惜乎朱子定正之書。竟不得見於世。豈非此經之不幸也夫。

〔汝成按〕今御纂周易折中。已復朱子之舊矣。

〈三〉 朱子『周易本義』

周易、伏羲　卦を畫し、文王　彖辭を作り、周公　爻辭を作りてより、之を經と謂ふ。經　上下二篇に分かつ。孔子十翼を作り、之を傳と謂ふ。傳　十篇に分かつ。彖傳上下二篇、象傳上下二篇、繫辭傳上下二篇、文言・說卦傳・序卦傳・雜卦傳、各〻一篇。

〔原注〕『漢書』藝文志に、「易經十二篇。」師古曰く、「上下經及び十翼、故に十二篇。」孔氏[1]の正義に曰く、「十翼とは、上彖一、下彖二、上象三、下象四、上繫五、下繫六、文言七、說卦八、序卦九、雜卦十。」陸德明[2]の『釋文』に曰く、太史公[3]　六家の要旨を論じ、「天下[4]　歸を同じくして塗を殊にす、致を一にして慮を百にす」を引き、之を『易』大傳と謂ふ。「班固[5]謂[6]ふ、孔子[7]晚にして易を好み、之を讀みて韋編三たび絶つ、而して之が傳を爲る、と。傳とは卽ち十翼なり。」前漢、六經と傳と皆別に行はる。後漢に至りて、諸儒始めて經傳を合して一と爲す。

漢より以來、費直・鄭玄・王弼の亂す所と爲り、孔子の言を取りて、逐條、卦爻の下に附す。

〔莊氏[8]曰く〕朱子發の『漢上易傳』に云ふ、「王弼[9]　文言を以て乾坤二卦に附す。」孔氏の正義[10]に云ふ、「輔嗣の意、以爲へらく、象は本、經[11]を釋す、宜しく相附近すべく、其の義　了し易し。故に爻の象辭を分かち、各〻其の當爻の下に附して之を言ふ。」按ずるに、此れ則ち費氏の古經、自ら是れ經傳相別かる。其の費氏始めて經を亂すと謂ふ者は妄なり。彖象を經に合する者は、康成より始まる。則ち「彖曰」「象曰」の文を加ふ。猶ほ傳を以て經の後に附するがごとし。今の乾卦の若き者是れなり。是れ鄭氏本と爲す。象を以て爻に附して、彖象を以て爻の前に移置するに至るは、輔嗣より始まる。則ち每爻、「象曰」の文を加ふ。今の坤卦以下の若き者是れな

り。又文言を以て乾坤二卦に附し、坤において亦「文言曰」の文を加ふるは、是れ王氏本と爲す。程正叔の『傳』之に因る。朱元晦の『本義』に及んで、始めて古文に依る。故に「周易上經」の條下に於て云ふ、「中間頗る諸儒の亂す所と爲る。近世、晁氏[12]始めて其の失を正すも、未だ盡く古文に合する能はず。呂氏[13]又更めて定著して經二卷・傳十卷と爲し、乃ち孔氏の舊に復すと云ふ。」洪武の初め、五經を天下の儒學に頒つ。而して『易』は程朱を兼用し、二氏亦各自、書を爲す。永樂中、『大全』を修し、乃ち朱子の卷次を取り、割裂して之を程傳の後に附す。

〔原注〕『易經大全』凡例に曰く、「程傳・本義、既に已に並びに行はる。而して諸家の定本、又各〻同じからず。故に今定めて程傳元本に從ひ、而して本義は仍ほ類を以て從ふ。」

而れども朱子の定むる所の古文、仍ほ復た殽亂す。「彖は卽ち文王の繫くる所の辭、傳は孔子の、經を釋する所以の辭なり。後、凡そ傳と言ふは此に放ふ。」此れ乃ち「彖上傳」條下の義。今乃ち「彖上傳」の三字を削りて、「大哉乾元」の下に附す。「象は卦の上下の兩象、及び兩象の六爻、周公の繫くる所の辭なり。」乃ち「象上傳」條下の義。今乃ち「象上傳」の三字を削りて、「天行健」の下に附す。「此の篇　象傳・象傳の意を申べて、以て乾坤二卦の蘊を盡くす。而して餘卦の說、因りて以て例推すべしと云ふ。」乃ち「文言」條下の義。今乃ち「文言」の二字を削りて、「元者善之長也」の下に附す。其の「彖曰」「象曰」「文言曰」の字は、皆、朱子本の無き所、復た程傳に依りて添入す。後來、士子　程傳の多なるに厭ひ、棄去して讀まず、專ら本義を用ふ。

〔原注〕弘治三年の會試、「物[14]以て苟合すべからざるのみ、故に之を受くるに賁を以てす」の題。陳輔[15]文、同考官楊守阯[16]批して曰く、「序卦、朱子　一言として以て其の義を釋する無し。蓋し程子　諸卦の首に於て其の義を疏析し、已に明かにして且つ盡くせるを以ての故なり。今の、經を治むる者、專ら本義を讀み、『易』の卷　八

百を踰ゆるに、傳有るを知る者、數人ならず。此れ能く之を知りて又善く作す。是を用て之を錄し、以て經生の、程傳を讀まざる者を激厲す。」[17]

而して『大全』本は、乃ち朝廷の頒つ所なれば、敢て輒ち改めず。遂に監版『傳義』の本に卽き、程傳を刊去して、程の次序を以て朱の次序と爲す。

〔原注〕虛齋蔡淸の『易經蒙引』に、之[18]を今竊かに刊行する所の『易經本義』と謂ふ。

今、四書の版本、每張十八行、每行十七字、而して注は皆小字。『書』『詩』『禮記』並びに同じ。惟だ『易』のみ每張二十二行、每行二十三字、而して本義、皆大字に作り、各經と同じからず。明かに後來の刻する所と爲す。是れ監版『傳義』本に依りて、程傳を刊去す。凡そ本義中、「程傳備はれり」と言ふ者は、又一「傳曰」を添へて、其の文を引く。皆今代の人の爲す所なり。

坊刻擅に古書を改む。宜しく嚴禁有るべし、是れ學臣の責。朱子の『詩集傳』序、蔡仲默の『書集傳』序、今の南京刊『大全』本、改めて『詩經大全』序、『書經大全』序と曰ふ。此れ卽ち古書を亂刻するの一驗。幸に監本尙ほ存すれば、其の謬亦見易きのみ。

相傳はりて且に二百年ならんとす。惜しいかな朱子定正の書、竟に世に見るを得ず。豈此の經の不幸に非ずや。

〔汝成按ずるに〕今の『御纂周易折中』、已に朱子の舊に復す。

(1) 孔氏正義　『周易正義』序、第六論夫子十翼。

(2) 陸德明釋文曰　「太史公……易大傳」が『經典釋文』には見えぬことから推すに、この六字は當に「班固謂孔子晩而好易」句の上に置くべきものであろう。

（3）太史公論六家要旨　『史記』太史公自序。
（4）天下……百慮　繫辭傳下の句。
（5）班固……十翼　『經典釋文』序錄。
（6）謂　原據では「曰」に作る。
（7）孔子……之傳　『漢書』儒林傳。なお、『史記』孔子世家に、「孔子晚而喜易。序彖繫象說卦文言。讀易韋編三絕」とある。
（8）莊氏　莊綬甲。出典未詳。
（9）王弼……二卦　この句は、『漢上易傳』に認められず、『漢上易叢說』に見える。
（10）正義　坤卦初六の象傳下の正義。
（11）經　原據では、この下に「文」の字有り。
（12）晁氏　晁說之。本條の注（19）を參照。
（13）呂氏　呂祖謙。『朱文公文集』卷五十九、答吳斗南別紙に、「呂伯恭頃嘗因晁氏本。更定古易十二篇。考訂頗詳」とある。
（14）物不……以賁　序卦傳。
（15）陳輔文　『明清進士題名碑錄索引』に據れば、陳文輔。廣東番禺の人。
（16）楊守阯　守陳の弟。傳は『明史』卷一百八十四。
（17）能知之而又善作　『論語』述而「蓋有不知而作之者。我無是也。」
（18）謂之今所竊刊行易經本義　文章に亂れ有り。『易經蒙引』上經卷一、乾卦、彖曰大哉乾元「且彖曰象曰字。全不可曉。……此今易之所以失。而古易之所以不可不復也。愚嘗竊謂易經大全。及今所刊行本義。俱欠更張。蓋自國初諸老收大全時。偶失權度。而學者至今多不知有古易矣。主司以此而搭題。士子依之而綴文。殊未安也。」

朱子記嵩山晁氏卦爻彖象說。謂古經始變於費氏。而卒大亂於王弼。此據孔氏正義曰。夫子所作彖辭。元在六爻經辭之後。以自卑退。不敢干亂先聖正經之辭。王輔嗣之意。以爲彖者本釋經文。宜相附近。其義易了。故分爻之象辭。各附其當爻下。如杜元凱注左傳。分經之年。與傳相附。故謂連合經傳。始於輔嗣。不知其實本於康成也。魏志。高貴鄉公幸太學。問博士淳于俊曰。孔子作彖象。鄭元作注。其釋經義一也。今彖象不與經文相連。而注連之。何也。俊對曰。

鄭元合彖象於經者。欲使學者尋省易了也。帝曰。若合之。於學誠便。則孔子曷爲不合以了學者乎。俊對曰。孔子恐其與文王相亂。是以不合。此聖人以不合爲謙。帝曰。若聖人以不合爲謙。則鄭元何獨不謙邪。俊對曰。古義宏深。聖問奥遠。非臣所能詳盡。是則康成之書。已先合之。不自輔嗣始矣。乃漢書儒林傳云。費直治易。無章句。徒以彖象繫辭文言解說上下經。則以傳附經。又不自康成始。朱子記晁氏說。謂初亂古制時。猶若今之乾卦。蓋自坤以下皆依此。後人又散之各爻之下。而獨存乾一卦。以見舊本相傳之樣式耳。愚嘗以其說推之。今乾卦彖曰爲一條。象曰爲一條。疑此費直所附之元本也。坤卦以小象散於各爻之下。其爲象曰者八。餘卦則爲象曰者七。此鄭元所連。高貴鄉公所見之本也。

〔楊氏曰〕玩魏主問辭。止是康成注連合一處耳。非并經連之者。古者注亦單行。

朱子の「嘗[19]山晁氏の卦爻彖象の說を記す」に謂ふ、「古經始めに費氏に變じ、而して卒に大いに王弼に亂る。」此れ孔氏の正義[20]に、「夫子の作る所の象辭、元、六爻の經の辭の後に在り。自ら卑退し、敢て先聖の正經の辭を干亂せざるを以てなり。王[21]輔嗣の意、以爲へらく、象は本、經文を釋す、宜しく相附近すべく、其の義了し易し。故に爻の象辭を分かち、各々[22]其の當爻の下に附す。杜[23]元凱の、『左傳』に注するに、經の年を分かち、傳と相附するが如し」と曰ふに據る。故に謂へらく、經傳を連合するは、輔嗣に始まる、と。其の實、康成に本づくを知らざるなり。魏[24]志に、高貴鄉公 太學に幸し、博士淳于俊に問ひて曰く、「孔子 象象を作り、鄭玄 注を作る、其の[25]、經義を釋するは一なり。今、象象 經文と相連ならず、而るに注之を連ぬるは、何ぞや。」俊對へて曰く、「鄭玄 象象を經に合する者は、學者をして尋省して了し易からしめんことを欲するなり。」帝曰く、「若し之を合するは、學に於て誠に便な

り、とせば、則ち孔子曷爲れぞ合して以て學者を了せざるや。」俊對へて曰く、「孔子　其の文王と相亂れんことを恐る、是を以て合せず。此れ聖人　合せざるを以て謙と爲す。」帝曰く、「若し聖人　合せざるを以て謙と爲す、とせば、則ち鄭玄何ぞ獨り謙ならざるや。」俊對へて曰く、「古義は弘深、聖問は奥遠なれば、臣の能く詳盡する所に非ず。」是れ則ち康成の書、已に先に之を合す、輔嗣より始まらず。乃ち『漢書』儒林傳に云はく、「費直[26]『易』を治め、章句無し。徒だ彖・象・繫辭・文言を以て上下經を解說す。」則ち傳を以て經に附するは、又康成より始まらず。朱子の「晁氏[27]の說を記す」に謂ふ、「初めて古制を亂す[28]時、猶ほ今の乾卦の若し。」蓋し坤より以下、皆此に依る、後人　又之を各爻の下に散ず。而して獨り乾の一卦を存し、以て舊本の相傳の樣式を見すのみ。愚嘗て其の說を以て之を推す。今、乾卦、「彖曰」を一條と爲し、「象曰」を一條と爲す。疑ふらくは此れ費直の附する所の元本ならん。坤卦、小象を以て各爻の下に散じ、其の「象曰」と爲す者八。餘卦は則ち「象曰」と爲す者七。此れ鄭玄の連ぬる所、高貴鄉公の見る所の本ならん。

〔楊氏[29]曰く〕魏主の問辭を玩するに、止だ是れ康成の注　一處に連合するのみ。經を并せて之を連ぬる者に非ず。古者、注亦單行す。

(19) 記嵩山晁氏卦爻彖象說　『朱文公文集』卷六十六。これは、晁說之の「題古周易後」(『嵩山文集』卷十八)を節錄し、評語を注記したもの。

(20) 正義　坤卦初六の象傳下の正義。

(21) 王輔嗣之意　原據では、「及至輔嗣之意」に作る。

(22) 各附其當爻下　原據では、この句の下に「言之」の二字有り。

(23) 如杜元凱注左傳　原據では、「如杜」を「猶如」に作る。

(24) 魏志　『三國志』魏書、三少帝紀。

(25) 其釋經義　原據では、「其所釋經義下也」に作り、且つ

該句の上に「雖聖賢不同」の五字有り。

(26) 費直……下經　原據には、「費直字長翁。東萊人也。治易爲郎。至單父令。長於卦筮。亡章句。徒以彖象系辭十篇文言解說上下經」とある。「徒以彖象系辭十篇文言解說上下經」句に關して、嚴靈峯は、「按。吳仁傑云。文言乃之言之誤。疑句倒誤。當作文言十篇」(『馬王堆帛書易經初步研究』二十三頁)と說く。

(27) 記晁氏說　本條の注(19)を參照。

(28) 亂　原據では「變亂」に作る。

(29) 楊氏　楊名宁。出典未詳。

程傳雖用輔嗣本。亦言其非古易。咸九三。咸其股。亦不處也。傳曰。云亦者。蓋彖辭本不與易相比。自作一處。故諸爻之象辭。意有相續者。此言亦者。承上爻辭也。

〔原注〕小畜九二。牽復。在中。亦不自失也。本義曰。亦者。承上爻義。

程傳　輔嗣の本を用ふと雖も、亦其の、古易に非ざるを言ふ。咸の九三に、「其の股に咸ずとは、亦處らざるなり。」傳に曰く、「亦と云ふ者は、蓋し彖辭　本、『易』と相比せず、自ら一處に作す。故に諸爻の象辭、意　相續く者有り。此に亦と言ふ者は、上爻の辭を承くるなり。」

〔原注〕小畜の九二に、「牽きて復す、中に在り。亦自ら失はざるなり。」本義に曰く、「亦とは、上爻の義を承く。」

秦以焚書而五經亡。本朝以取士而五經亡。今之爲科擧之學者。大率皆帖括熟爛之言。不能通知大義者也。而易春秋尤

爲繆盩。以彖傳合大象。以大象合爻。以爻合小象。二必臣。五必君。陰卦必云小人。陽卦必云君子。於是此一經者。爲拾瀋之書。而易亡矣。取胡氏傳一句兩句爲旨。而以經事之相類者。合以爲題。傳爲主。經爲客。有以彼經證此經之題。有用彼經而隱此經之題。於是此一經者。爲射覆之書。而春秋亡矣。

〔原注〕天順三年。九月甲辰。浙江温州府永嘉縣儒學教諭雍懋言。比者浙江鄉試。春秋摘一十六段。配作一題。頭緒太多。及所鏤程文。乃太簡略。而不統貫。且春秋爲經。屬詞比事。變例無窮。考官出題。往往棄經任傳。甚至參以己意。名雖經題。實則射覆。乞敕禁止。上從之。

復程朱之書以存易。

〔原注〕當各自爲本。

備三傳啖趙諸家之說以存春秋。必有待於後之興文教者。

秦、焚書を以てして五經亡び、本朝、取士を以てして五經亡ぶ。今の、科擧の學を爲(をさ)むる者、大率、皆、熟爛の言を帖括し、大義を通知する能はざる者なり。而して『易』『春秋』を尤も繆盩と爲す。象傳を以て大象に合し、大象を以て爻に合し、爻を以て小象に合す。二は必ず臣とし、五は必ず君とす。陰卦には必ず小人と云ひ、陽卦には必ず君子と云ふ。是に於て此の一經は、拾瀋[30]の書と爲り、而して『易』亡ぶ。胡氏傳の一句兩句を取りて旨と爲し、而して經事[31]の相類する者を以て、合して以て題と爲す。傳を主と爲し、經を客と爲す。彼の經を以て此の經を證するの題有り、彼の經を用ひて此の經を隱すの題有り。是に於て此の一經は、射覆[32]の書と爲り、而して『春秋』亡ぶ。

〔原注〕天順三年、九月甲辰、浙江温州府永嘉縣儒學教諭、雍懋言ふ、「比者(このごろ)、浙江の鄉試に、『春秋』、一十六

段を摘し、配して一題と作す。頭緒太だ多きも、鏤する所の程文に及んでは、乃ち太だ簡略にして、統貫せず。且つ『春秋』の經爲る、屬詞比事、變例[33][34]窮り無し。考官の出題、往往、經[35]を棄てて傳に任じ、甚だしきは參するに己が意を以てするに至る。名は經題なりと雖も、實は則ち射覆なり。敕して禁止せんことを乞ふ。」上之に從ふ。

程朱の書を復して以て『易』を存し、

〔原注〕當に各自、本と爲すべし。

三傳・啖趙諸家の說を備へて以て『春秋』を存せば、必ず後の、文教を興す者に待つ有らん。

(30) 拾瀋　『左傳』哀公三年「無備而官辨者。猶拾瀋也。」杜注「瀋。汁也。」

(31) 經事　『史記』太史公自序「守經事而不知其宜。遭變事而不知其權。」

(32) 射覆　『漢書』東方朔傳「上嘗使數家射覆。置守宮盂下。射之。皆不能中。」

(33) 屬詞比事　『禮記』經解「屬辭比事。春秋敎也。」

(34) 變例　杜預、春秋序「諸稱。書。不書。先書。故書。不言。不稱。書曰之類。皆所以起新舊發大義。謂之變例。」

(35) 棄經任傳　『中說』天地「春秋之失。自歆向始也。棄經而任傳。」この語はまた、朱子の乞脩三禮劄子（『文集』卷十四）にも見ゆ。

卦爻外無別象

聖人設卦觀象。而繫之辭。若文王周公是已。夫子作傳。傳中更無別象。其所言卦之本象。若天地雷風水火山澤之外。惟頤中有物。本之卦名。有飛鳥之象。本之卦辭。而夫子未嘗增設一象也。荀爽虞翻之徒。穿鑿附會。象外生象。以同聲相應爲震巽。同氣相求爲艮兌。水流濕火就燥爲坎離。雲從龍。則曰乾爲龍。風從虎。則曰坤爲虎。十翼之中。無語不求其象。而易之大指荒矣。豈知聖人立言取譬。固與後之文人同其體例。何嘗屑屑於象哉。王弼之注。雖涉於[元]虛。然已一掃易學之榛蕪。而開之大路矣。

〔原注〕王輔嗣略例曰。互體不足。遂及卦變。變又不足。推致五行。一失其原。巧喩彌甚。不有程子大義。何由而明乎。

〔汝成案〕說卦別象。漢時尤多。今約其數。乾八十二。坤一百十三。震五十八。巽四十五。坎七十五。離三十。艮五十三。兌十八。雖皆穿鑿滋生。然易理閎深。曲包道藝。觀象玩占。義或有取爾。

〈四〉 卦爻の外に別の象無し

聖人[1] 卦を設け象を觀、而して之が辭を繫く。文王・周公の若き、是れのみ。夫子 傳を作り、傳中、更に別の象無し。其の言ふ所の卦の本象、天地雷風水火山澤の若きの外、惟だ「頤[2]中に物有り」もて、之を卦名に本づけ、「飛[3]鳥の象有り」もて、之を卦辭に本づくるのみ。而して夫子未だ嘗て一象を增設せざるなり。荀爽・虞翻の徒、穿鑿附會して、象外に象を生ず。「同[4]聲相應ず」を以て震巽と爲し、「同[5]氣相求む」を艮兌と爲す。「水[6]は濕に流れ、火は燥に就く」を坎離と爲す。「雲[7]は龍に從ふ」には、則ち乾を龍と爲すと曰ひ、「風[8]は虎に從ふ」には、則ち坤を虎と爲すと曰ふ。十翼の中、語として其の象を求めざるは無し。而して『易』の大指荒す。豈知らんや、聖人 言を立て譬を

取るに、固に後の文人と其の體例を同じくし、何ぞ嘗て象に屑屑たらんや。王弼の注、玄虛に涉ると雖も、然れども已に易學の榛蕪を一掃して、之が大路を開く。

〔原注〕王輔嗣の『略例』[9]に曰く、「互體足らず、遂に卦變に及び、變又足らず、五行を推致す。一たび其の原を失ひて、巧喻[10]彌〻甚だし。」

程子の大義有らずんば、何に由りて明かにせんや。

〔汝成案ずるに〕卦の別の象を說くは、漢時尤も多し。今其の數を約するに、乾は八十二、坤は一百十三、震は五十八、巽は四十五、坎は七十五、離は三十、艮は五十三、兌は十八。皆穿鑿滋生すと雖も、然れども易の理は閎深、道藝を曲包す。象[11]を觀、占を玩するに、義或は取る有るのみ。

(1) 聖人……之辭　繫辭傳上「聖人設卦觀象。繫辭焉。而明吉凶。」

(2) 頤中有物　噬嗑卦彖傳。

(3) 有飛鳥之象　小過卦彖傳。

(4) 同聲……震巽　李鼎祚『周易集解』乾卦文言傳「虞翻曰。謂震巽也。庖犧觀變而放八卦。雷風相薄。故相應也。」

(5) 同氣……艮兌　李鼎祚『周易集解』乾卦文言傳「虞翻曰。謂艮兌。山澤通氣。故相求也。」

(6) 水流……坎離　李鼎祚『周易集解』乾卦文言傳「荀爽曰。陽動之坤而爲坎。坤者純陰。故曰溼也。」「荀爽曰。陰動之乾而成离。乾者純陽。故曰燥也。」「虞翻曰。离上而坎下。水火不相射。」

(7) 雲從……爲龍　李鼎祚『周易集解』乾卦文言傳「虞翻曰。乾爲龍。雲生天。故從龍也。」

(8) 風從……爲虎　李鼎祚『周易集解』乾卦文言傳「虞翻曰。坤爲虎。風生地。故從虎也。」

(9) 略例　『周易略例』明象。

(10) 巧喻彌甚　『周易略例』の諸本、喻を愈に作る。案ずるに、この句の下の邢璹の注に、「一失聖人之原旨。廣爲譬喻。失之甚也」とあれば、元来、「喻」に作っていたことは明かで

ある。顧炎武は、上に「聖人立言取譬」と述べているから、多分、文義を汲んで、「喩」に改正したのであろう。なお、盧文弨も『周易略例校正』において、「巧愈彌甚」句を掲げて、「石經同。山井鼎云。恐是喩誤。案錢本作僞」と記している。

(11) 觀象玩占　繫辭傳上「是故君子居則觀其象而玩其辭。動則觀其變而玩其占。」

易之互體卦變。詩之叶韻。春秋之例月日。經說之繚繞破碎於俗儒者多矣。文中子曰。九師興而易道微。三傳作而春秋散。

『易』の互體・卦變、『詩』の叶韻、『春秋』の、月日を例する、經說の、俗儒に繚繞破碎せらるる者多し。文中子曰く、「九師(13)興りて易道微なり、三傳作りて『春秋』散ず。」(12)

(12) 文中子　『中說』天地。

(13) 九師　阮逸注「淮南王聘九人明易者。撰道訓二十篇。號九師易。」

卦變

卦變之說。不始於孔子。周公繫損之六三。已言之矣。曰三人行則損一人。一人行則得其友。是六子之變。皆出於乾

坤。無所謂自復姤臨遯而來者。當從程傳。

〔原注〕蘇軾王炎。皆同此說。〔江氏曰〕彖傳有言剛柔往來上下者。虞翻謂之卦變。本義謂自某卦而來者。其法以相連之兩爻。上下相易取之。似未安。今考文王之易。以反對爲次序。則所謂往來上下者。卽取切近相反之卦。非別取諸他卦也。往來之義。莫明于泰否二卦彖辭。否反爲泰。三陰往居外。三陽來居內。故曰小往大來。泰反爲否。三陽往居外。三陰來居內。故曰大往小來。彖傳所謂剛來柔來者本此。〔楊氏曰〕王雙溪之經說。今皆不可得。

〈五〉 卦變

卦變の說、孔子に始まらず。周公 損の六三に繫け、已に之を言ふ。曰く、「三人行けば則ち一人を損し、一人行けば則ち其の友を得。」是れ六子[1]の變、皆乾坤に出づ。所謂復[2]・姤・臨・遯よりして來る者無し、當に程傳[3]に從ふべし。

〔原注〕蘇軾[4]・王炎[5]、皆此の說に同じ。

〔江氏曰く〕[6]彖傳に剛柔の往來上下を言ふ者有り。虞翻之を卦變と謂ふ。本義には某卦より來る者と謂ふ。其の法、相連なるの兩爻を以て、上下相易へて之を取る。未だ安からざるに似たり。今、文王の易を考ふるに、反對を以て次序と爲せば、則ち所謂往來上下とは、卽ち切近の相反するの卦に取る、別に諸を他卦に取るに非ざるなり。往來の義、泰否二卦の彖辭より明かなるは莫し。否の反を泰と爲す。三陰往きて外に居り、三陽來りて內に居り。故に「小往き大來る」と曰ふ。泰の反を否と爲す。三陽往きて外に居り、三陰來りて內に居り。故に「大往き小來る」と曰ふ。彖傳の所謂剛來・柔來とは此に本づく。

〔楊氏[7]曰く〕王[8]雙溪の經說、今、皆得べからず。

(1) 六子之變　六子とは、說卦傳に所謂長男・中男・少男と長女・中女・少女のことだが、六子の變は、三男の一と三女の一を組合せた卦を指す。なお、本條の注(4)(5)を參照。

(2) 自復姤臨遯而來　一例として、『周易本義』卦變圖に、「凡一陰一陽之卦。各六。皆自復姤而來」と述べて十二卦を掲げ、「凡二陰二陽之卦。各十有五。皆自臨遯而來」と述べて三十卦を掲げる。

(3) 程傳　『朱子語類』卷六十七、易三、綱領下、卦變卦體第五條では、專ら乾坤を以て卦變を說く程子の立場が批判されている。

(4) 蘇軾　『東坡先生易傳』卷三、賁卦彖傳の下の所說。賁を泰の變とする見解の不可なること、三子三女相値の卦の意義などについて論じる。因みに、『漢上易圖』上では、李挺之の六十四卦相生圖の後に、蘇軾のこの說を「或曰」として節錄した上で、これを駁す。

(5) 王炎　『雙溪類稾』卷二十六、卦變論。邵雍に始まり朱震が從う所の、乾坤を父母となし、復姤を小父母となす卦變の說を排す。

(6) 江氏　江永『群經補義』卦變考の冒頭の一節。引用に省略有り。なお、戴震『經考』卷一、卦變に、江氏說を掲げたのち、「江先生主序卦之反對相易。然損之六三爻辭云。三人行則損一人。一人行則得其友。似指本卦上下體。而賁之彖傳。柔來而文剛。分剛上而文柔。指上下體。則分字尤明。主反對。則不免費辭也。大致繫辭所稱。上下無常。剛柔相易者。或兩卦相反對相易。或卦之兩體上下相易。兼二說乃備」と評する。

(7) 楊氏　楊名宁。出典未詳。

(8) 王雙溪　『四庫全書』本『雙溪類稾』の提要に云う、「雙溪類稾。二十七卷。宋王炎撰。炎字晦叔。婺源人。乾道五年進士。官至軍器少監。與淳熙中觀文殿大學士王炎。名姓偶同。非一人也。所著有讀易筆記。尙書小傳。禮記。論語。孝經。老子解。春秋衍義。象數稽疑。禹貢辨。考工記。鄉飲酒儀。諸經考疑。編年通紀。紀年提要。天對解。韓柳辨。證傷寒論。總題曰雙溪類稾。今已無傳。惟詩文集僅存。仍以雙溪類稾爲名。」なお、『雙溪類稾』卷二十五に讀易筆記序を收める。

互體

凡卦爻二至四。三至五。兩體交互。各成一卦。先儒謂之互體。其說已見於左氏。莊公二十二年。陳侯筮。遇觀之否。曰。風爲天。於土上山也。注自二至四有艮象。

〔原注〕四爻變故。

艮爲山是也。然夫子未嘗及之。後人以雜物撰德之語當之。非也。其所論二與四。三與五。同功而異位。特就兩爻相較言之。初何嘗有互體之說。

〈六〉 互體

凡そ卦爻の二[1]より四に至るまで、三より五に至るまで、兩體交互し、各〻一卦を成す、先儒之を互體と謂ふ。其の說已に左氏に見ゆ。莊公二十二年、陳侯　筮せしむるに、觀の、否に之くに遇ふ。曰く、「風　天と爲る、土上に於て山あるなり。」注に、「二より四に至るまで、艮の象有り。

〔原注〕四爻變ずるが故なり。

艮を山と爲す」、是れなり。然れども夫子未だ嘗て之に及ばず。後人[2]「雜物撰德」の語を以て之に當つるは、非なり。其の論ずる所の「二[3]と四と、三と五とは、功を同じくして位を異にす」とは、特だ兩爻に就きて相較べて之を言ふ、初めより何ぞ嘗て互體の說有らんや。

(1) 二至……互體　『左傳』莊公二十二年孔疏の文。因みに、『困學紀聞』卷一に、「京氏謂二至四爲互體。三至五爲約象。儀禮疏云。二至四。三至五。兩體交互。各成一卦。先儒謂之互體」とあるが、文中の「儀禮疏」は、「左傳疏」の誤。

(2) 後人……當之　『朱子語類』卷六十七、易三、綱領下、卦變卦體第十三條に、「問。易中互體之說。共父以爲雜物撰德。辨是與非。則非中爻不備。此是說互體。先生曰。今人言互體者。皆以此爲說。但亦有取不得處也。……此等皆支蔓。不必深泥」と見える。共父は、劉子翬の從子、劉珙。やや降って、胡炳文も『周易本義通釋』卷六、繫辭下傳第九章及び卷十、雜卦傳において、所謂雜物撰德を中四爻の互卦を說いたものと解する。

(3) 二與……異位　「雜物撰德云々」の後に續く繫辭傳下の句。

晉書。荀顗嘗難鍾會易無互體。見稱於世。其文不傳。新安王炎晦叔。嘗問張南軒曰。伊川令學者先看王輔嗣胡翼之王介甫三家易。何也。南軒曰。三家不論互體故爾。

〔全氏曰〕漢晉諸儒。無不言互體者。至王輔嗣鍾士季。始力排之。然亦終不能絀也。特是漢儒言互。祇就一卦一爻配象。未能探其所以然。至王伯厚作鄭康成易注序始發之。謂八卦之中。乾坤純乎陰陽。故無互體。若震巽艮兌。分主四時。而坎離居中以運之。是以下互震而上互艮者坎也。下互巽而上互兌者離也。若震巽分乾坤之下畫。則上互有坎離。艮兌分乾坤之上畫。則下互有坎離。而震艮又自相互。巽兌又自相互。斯陰陽老少之交相資也。愚再以十辟卦推之。五陽辟以震兌與乾坤合而成。五陰辟以巽艮與乾坤合而成。乃夬姤近乎純乾。剝復近乎純坤。故無互體。而艮兌之合乾坤也。爲臨爲遯。則下互有震巽。震巽之合乾坤也。爲大壯爲觀。則上互有艮兌。至坤乾合而爲泰。則下互兌而上互震。坤乾合而爲否。則下互艮而上互巽。坎離于十辟卦雖不預。而以既未濟自相互。是陰

陽消長之迭爲用也。蓋伯厚八卦之旨。卽中央寄王之義也。愚所推十辟卦之旨。卽六律還宮之義也。是以朱子晩年謂從左氏悟得互體。而服漢儒之善于說經者。有自來矣。

『晉書』[4]に、荀顗嘗て鍾會の「易に互體無し」を難じ、世に稱せらる、と。其の文　傳はらず。新安の王炎晦叔[5]、嘗て張南軒に問ひて曰く、「伊川　學者をして先づ王輔嗣・胡翼之・王介甫の三家の『易』を看しむるは、何ぞや。」南軒曰く、「三家　互體を論ぜざるが故[6]のみ。」

〔全氏曰く[7]〕漢晉の諸儒、互體を言はざる者無し。王輔嗣・鍾士季に至りて、始めて力めて之を排す。然れども亦終に紲くる能はざるなり。特だ是れ漢儒　互を言ふは、祇だ一卦一爻に就きて象を配[8]し、未だ其の然る所以を探る能はず。王伯厚[9]『鄭康成易注』序を作るに至りて始めて之を發す。謂へらく、「八卦の中、乾坤は陰陽に純なり、故に互體無し。震巽艮兌の若きは、四時を分主し、而して坎離は中に居りて以て之を運らす。是を以て下互　震にして、上互　艮なる者は坎なり。下互　巽にして、上互　兌なる者は離なり。震巽の若きは乾坤の下畫を分かてば、則ち上互に坎離有り。艮兌は乾坤の上畫を分かてば、則ち下互に坎離有り。而して震艮又自ら相互し、巽兌又自ら相互す。斯れ陰陽老少の交〻相資するなり。」愚再び十辟卦を以て之を推すに、五陽辟は震兌乾坤と合するを以てして成り、五陰辟は巽艮　乾坤と合するを以てして成る。乃ち夬姤は純乾に近く、剝復は純坤に近し。故に互體無し。而して艮兌の、乾坤に合するや、臨と爲り遯と爲り、則ち下互に震巽有り。震巽の、乾坤に合するや、大壯と爲り觀と爲り、則ち上互に艮兌有り。坤乾合して泰と爲るに至りては、則ち下互は兌にして上互は震。坤乾合して否と爲りては、則ち下互は艮にして上互は巽。坎離　十辟卦において預らずと雖も、

而れども既未濟を以て自ら相互す。是れ陰陽消長の迭に用を爲すなり。蓋し伯厚の八卦の旨は、卽ち中央寄王の義なり。愚の推す所の十辟卦の旨は、卽ち六律還宮の義なり。是を以て朱子　晩年に、左氏に從ひて互體を悟得す、と謂ひて、漢儒の、經を說くに善きに服する者は、よりて來る有り。

(4) 晉書　卷三十九、荀顗傳。『三國志』魏書、鍾會傳にも、「會嘗論易無互體、才性同異」とある。

(5) 新安……故爾　『直齋書錄解題』卷一、周易口義の條。因みに、『河南邵氏聞見後錄』卷五に、謝湜に貽った伊川の書を錄して、「若欲治易。先尋繹令熟。只看王弼胡先生王介甫三家文字。令通貫。餘人易說。無取枉費功」と云う。また、『朱子語類』卷六十七、易三、綱領下、程子易傳第九條にも、「看易傳、若自無所得。縱看數家。反被其惑。伊川敎人看易。只看王弼注胡安定王介甫解。今有伊川傳。且只看此尤妙」と見える。

(6) 故　原據では、この下に「云」字有り。

(7) 全氏　全祖望『經史問答』易、答董秉純問第一條。引用に省略有り。

(8) 配　原據では、「取」に作る。

(9) 王伯厚　以下の引證は、全氏が王應麟の所說に卽し、敷衍する形でこれを換言したもの。今、王氏の序の前半部分の原文を示せば、次の通りである。「鄭康成學費氏易。爲注九卷。多論互體。以互體求易。左氏以來有之。凡卦爻二至四。三至五。兩體交互。各成一卦。是謂一卦含四卦。繫辭謂之中爻。所謂八卦相盪。六爻相雜。唯其時物。雜物撰德。是也。唯乾坤无互體。蓋純乎陽。純乎陰也。餘六子之卦。皆有互體。坎之六畫。其互體含艮震。而艮震之互體亦含坎。離之六畫。其互體含兌巽。而兌巽之互體亦含離。三陽卦之體。互自相含。三陰卦之體。亦互自相含也。」

朱子本義。不取互體之說。惟大壯六五云。卦體似兌。有羊象焉。不言互而言似。似者。合兩爻爲一爻。則似之也。

〔原注〕又謂頤初九靈龜。是伏得離卦。

然此又刱先儒所未有。不如言互體矣。大壯自三至五成兌。兌爲羊。故爻辭並言羊。

朱子の『本義』、互體の說を取らず。惟だ大壯の六五に云ふ、「卦體　兌に似たり、羊の象有り。」「互」を言はずして「似」と言ふ。「似」とは、兩爻を合して一爻と爲せば、則ち之に似たるなり。

〔原注〕又謂ふ、「頤(10)の初九の靈龜は、是れ伏　離卦を得。」

然れども此れ又先儒の未だ有らざる所を刱す、互體を言ふに如かず。大壯　三より五に至るまでもて兌を成す。兌は羊と爲す。故に爻辭並びに羊を言ふ。

(10) 頤初……離卦　出典未詳。

六爻言位

易傳中言位者有二義。列貴賤者存乎位。五爲君位。二三四爲臣位。故皆曰同功而異位。而初上爲無位之爻。譬之於人。初爲未仕之人。上則隱淪之士。皆不爲臣也。

〔原注〕明夷上六爲失位之君。乃其變例。其但取初終之義者。亦不盡拘。

故乾之上曰。貴而无位。需之上曰。不當位。

〔原注〕王弼注需上六曰。處无位之地。不當位者也。程子傳亦云。此爵位之位。非陰陽之位。〔楊氏曰〕朱子以爲未詳。似不取伊川之說。

若以一卦之體言之。則皆謂之位。故曰六位時成。曰易六位而成章。是則卦爻之位。非取象於人之位矣。此意已見於王弼略例。但必強彼合此。而謂初上無陰陽定位。則不可通矣。記曰。夫言豈一端而已。夫各有所當也。

〈七〉 六爻 位を言ふ

『易』傳中に位を言ふ者、二義有り。貴賤を列する者、位に存す。五を君の位と爲し、二三四を臣の位と爲す。故に皆曰く、「功を同じくして位を異にす。」而して初上を無位の爻と爲す。之を人に譬ふれば、初を未だ仕へざるの人と爲し、上は則ち隱淪の士、皆、臣と爲らざるなり。

〔原注〕明夷の上六を失位の君と爲すは、乃ち其の變例。其の但初終の義を取る者も、亦盡くは拘せず。

故に乾の上に曰く、「貴くして位无し。」需の上に曰く、「位に當たらず。」

〔原注〕王弼　需の上六に注して曰く、「无位の地に處り、位に當たらざる者なり。」程子の傳にも亦云はく、「此れ爵位の位にして、陰陽の位に非ず。」

〔楊氏曰く〕朱子以て未だ詳かならずと爲すは、伊川の說を取らざるに似たり。

若し一卦の體を以て之を言へば、則ち皆之を位と謂ふ。故に曰く、「六位　時に成る」、曰く、「易は六位にして章を成す。」是れ則ち卦爻の位にして、象を人の位に取るに非ず。此の意已に王弼の『略例』に見ゆ。但必ず彼を強ひて此に合して、「初上　陰陽の定位無し」と謂ふは、則ち通ずべからず。記に曰く、「夫れ言は豈一端のみならんや、夫

れ各〻當たる所有るなり。」

（1）同功而異位　繫辭傳下「二與四同功而異位……三與五同功而異位。」
（2）乾之上　乾卦文言傳。
（3）需之上　需卦上六象傳。
（4）程子傳　噬嗑卦初九爻辭『程傳』「若需而上六云不當位。乾上九云无位。爵位之位。非陰陽之位也。」
（5）楊氏　楊名宁。出典未詳。
（6）六位時成　乾卦彖傳。
（7）易六位而成章　說卦傳。
（8）略例　『周易略例』辯位。
（9）記　『禮記』祭義。

九二君德

爲人臣者。必先具有人君之德。而後可以堯舜其君。故伊尹之言曰。惟尹躬暨湯。咸有一德。武王之誓亦曰。予有亂臣十人。同心同德。

〈八〉九二の君德

人臣爲る者、必ず先づ人君の德を具有し、而る後、以て其の君を堯舜たらしむべし。故に伊尹の言に曰く、「惟れ尹が躬　湯に暨び、咸一德有り。」武王の誓にも亦曰く、「予に亂臣十人有り、心を同じうし德を同じうす。」

（1）九二君德　乾卦文言傳「易曰。見龍在田。利見大人。君德也。」
（2）堯舜其君　『孟子』萬章上「與我處畎畝之中。由是以樂堯舜之道。吾豈若使是君爲堯舜之君哉。」
（3）伊尹之言　『尚書』咸有一德（僞古文）。
（4）武王之誓　『尚書』泰誓中（僞古文）。

師出以律

以湯武之仁義爲心。以桓文之節制爲用。斯之謂律。律卽卦辭之所謂貞也。論語言子之所愼者戰。長勺以詐而敗齊。泓以不禽二毛而敗於楚。春秋皆不予之。故先爲不可勝。以待敵之可勝。雖三王之兵。未有易此者也。

〔楊氏曰〕湯武行軍。應亦有法度。非僅以其仁義也。配入桓文。非能擇言者。

〈九〉師[1]出づるに律を以てす

湯[2]武の仁義を以て心と爲し、桓文の節制を以て用と爲す、斯を之れ律と謂ふ。律は卽ち卦[3]辭の所謂貞なり。『論[4]語』に、子の愼む所の者、戰あるを言ふ。長[5]勺には詐を以てして齊を敗り、泓[6]には二毛を禽にせざるを以てして楚に敗る。『春秋』皆之を予[ゆる]さず。故に先[7]づ勝つべからざるを爲し、以て敵の勝つべきを待つ。三王の兵と雖も、未だ此を易ふる者有らざるなり。

〔楊[8]氏曰く〕湯武の行軍、應に亦法度有るべし、僅かに其の仁義を以てするのみに非ざるなり。桓文を配入する

は、能く言を擇ぶ者に非ず。

(1) 師出以律　師卦初六爻辭。
(2) 湯武之仁義・桓文之節制　『荀子』議兵篇「秦之銳士。不可以當桓文之節制。桓文之節制。不可以敵湯武之仁義。」
(3) 卦辭　師卦卦辭「師。貞。丈人吉。无咎。」
(4) 論語　述而「子之所愼。齊。戰。疾。」
(5) 長勺　『左傳』莊公十年。
(6) 泓　『左傳』僖公二十二年。
(7) 先爲……之可勝　『孫子』形篇。
(8) 楊氏　楊名宁。出典未詳。

既雨既處

陰陽之義。莫著於夫婦。故爻辭以此言之。小畜之時。求如任姒之賢。二南之化。不可得矣。陰畜陽。婦制夫。其畜而不和。猶可言也。三之反目。隋文帝之於獨孤后也。既和而惟其所爲。不可言也。上之既雨。猶高宗之於武后也。

〔楊氏曰〕猶當作唐。

〈十〉既(1)に雨ふり既に處る

陰陽の義、夫婦より著るるは莫し。故に爻辭此を以て之を言ふ。小畜の時、任姒の賢、二南の化の如きを求むるも、得べからず。陰　陽を畜(とど)め、婦　夫を制すればなり。其の畜めて和せざるは、猶ほ言ふべきなり。三(2)の反目は、隋の

文帝の、獨孤后に於けるなり。既に和して惟だ其の爲す所は、言ふべからざるなり。上の既に雨ふるは、猶（唐）の高宗の、武后に於けるなり。

〔楊氏曰く〕猶、當に唐に作るべし。

（1）既雨既處　小畜卦上九爻辭。本條には、二姓に事えることに對する批判が寓せられていると思われる。

（2）三之反目　小畜卦九三爻辭「輿說輻。夫妻反目。」

（3）楊氏　楊名宁。出典未詳。

武人爲於大君

武人爲於大君。非武人爲大君也。如書予欲宣力四方。汝爲。之爲。六三才弱志剛。雖欲有爲。而不克濟。以之履虎。有咥人之凶也。惟武人之效力於其君。其濟則君之靈也。不濟則以死繼之。是當勉爲之。而不可避耳。故有斷脰決腹。一瞑而萬世不視。不知所益。以憂社稷者。莫敖大心是也。

〔原注〕戰國策。

過涉之凶。其何咎哉。

＜十一＞　武人[1]　大君に爲す

「武人爲於大君」は、武人[2]　大君と爲るに非ざるなり。『書』[3]の「予　力を四方に宣べんと欲す、汝爲せ」の爲の如し。六三　才は弱く志は剛[4]。爲す有らんと欲すと雖も、而れども濟す克はず。之を以て虎を履めば、人を咥ふの凶有るなり。惟だ武人の、力を其の君に效す、其の濟すは則ち君の靈なり。濟さざるは則ち死を以て之を繼ぐ。是れ當に勉めて之を爲すべくして、避くべからざるのみ。「故に脰を斷ち腹を決き、一たび瞑して萬世視ず、益する所を知らずして、以て社稷を憂ふる者有り、莫敖大心、是れなり。」

〔原注〕戰國策[6]。

過ぎて涉るの凶、其れ何ぞ咎めんや。

（1）武人爲於大君　履卦六三爻辭。「於」は諸本、「于」に作る。

（2）武人爲大君　『程傳』『本義』等々の訓。

（3）書　益稷。

（4）才弱志剛　六三象辭「咥人之凶。位不當也。武人爲于大君。志剛也」句下の『程傳』に、「以武人爲喩者。以其處陽。才弱而志剛也」とある。

（5）履虎……之凶　六三爻辭「履虎尾。咥人。凶。」

（6）戰國策　楚一。なお、原據には「有」字無し。

（7）過涉……咎哉　大過卦上六象辭「過涉之凶。不可咎也。」

自邑告命

人主所居謂之邑。詩曰。商邑翼翼。四方之極。書曰。惟尹躬先見於西邑夏。曰。惟臣附於大邑周。曰。作新大邑於東

國洛。曰。肆予敢求爾於天邑商。

〔原注〕武王之妃。謂之邑姜。

白虎通曰。夏曰夏邑。商曰商邑。周曰京師。是也。

〔原注〕周官始以四井爲邑。

泰之上六。政教陵夷之後。一人僅亦守府。而號令不出於國門。於是焉而用師則不可。君子處此。當守正以俟時而已。桓王不知此也。故一用師。而祝聃之矢。遂中王肩。唐昭宗不知此也。故一用師。而邠岐之兵。直犯闕下。然則保泰者。可不豫爲之計哉。

〈十二〉 邑[1]より告命す

人主の居る所、之を邑と謂ふ。『詩』に曰く、「商邑[2]翼翼たり、四方の極。」『書』に曰く、「惟[3]れ尹躬づから西邑夏を先見す。」曰く、「惟[4]れ大邑周に臣附す。」曰く、「新[5]大邑を東國洛に作る。」曰く、「肆[6]に予敢て爾を天邑商に求む。」

〔原注〕武王の妃、之を邑姜[7]と謂ふ。

『白虎通[8]』に曰く、「夏には夏邑と曰ひ、商には商邑と曰ひ、周には京師と曰ふ」、是れなり。

〔原注〕『周官[9]』、始めて四井を以て邑と爲す。

泰の上六、政教陵夷の後、一人僅かに亦府を守りて、號令　國門より出でず。是に於て師を用ひれば則ち可ならず。君子此に處れば、當に正を守りて以て時を俟つべきのみ。桓王此を知らざるなり。故に一たび師を用ひて、祝聃[10]の矢、遂に王の肩に中たる。唐の昭宗此を知らざるなり。故に一たび師を用ひて、邠岐[11]の兵、直ちに闕下を犯す。然ら

ば則ち泰を保つ者、豫め之が計を爲さざるべけんや。

(1) 自邑告命　泰卦上六爻辭。
(2) 商邑……之極　商頌、殷武。
(3) 惟尹……邑夏　太甲（僞古文）。
(4) 惟臣……邑周　『孟子』滕文公下所引逸『書』。
(5) 作新……國洛　康誥。
(6) 肆予……邑商　多士。
(7) 邑姜　邑姜は、『左傳』昭公元年及び十年に見える。
(8) 白虎通　京師篇。
(9) 周官　地官、小司徒。
(10) 祝聃……王肩　『左傳』桓公五年。
(11) 邠岐……闕下　『舊唐書』昭宗紀、乾寧三年。邠岐の兵は、李茂貞の軍を指す。

易之言邑者。皆內治之事。夬曰。告自邑。如康王之命畢公。彰善癉惡。樹之風聲者也。晉之上九曰。維用伐邑。如王國之大夫。大車檻檻。毳衣如菼。國人畏之而不敢奔者也。其爲自治。則同皆聖人之所取也。

〔原注〕比之九五。邑人不誡。是亦內治修而遠人服之意。

『易』の、邑を言ふ者は、皆內治の事。夬(12)に曰く、「告ぐるに邑よりす。」康(13)王の、畢公に命じて、善を彰はし惡を癉(や)ましめ、之が風聲を樹てしむる者の如きなり。晉(14)の上九に曰く、「維れ用ひて邑を伐つ。」王(15)國の大夫、大車は檻檻、毳衣は菼の如く、國人之を畏れて敢て奔らざる者の如きなり。其の自ら治むるを爲すは、則ち同に皆聖人の取る所なり。

〔原注〕比[16]の九五に、「邑人誡めず。」是れ亦内治修まりて遠人服するの意。

(12) 夬　夬卦卦辭。
(13) 康王……風聲　『尚書』畢命（僞古文）。
(14) 晉之上九　爻辭。
(15) 王國……敢奔　『毛詩』王風、大車「大車檻檻。毳衣如菼。豈不爾思。畏子不敢。」集傳「爾。淫奔者相命之詞也。子。大夫也。不敢。不敢奔也。」
(16) 比之九五　爻辭。

成有渝。无咎。

昔穆王欲肆其心。周行天下。將皆必有車轍馬迹焉。祭公謀父作祈招之詩。以止王心。王是以獲歿於祇宮。傳曰。人誰無過。過而能改。善莫大焉。聖人慮人之有過。不能改之於初。且將遂其非而不反也。敎之以成有渝。无咎。雖其漸染之深。放肆之久。而惕然自省。猶可以不至於敗亡。以視夫迷復之凶。不可同年而論矣。故曰。惟狂克念作聖。

〔汝成案〕訟三。心險渝卽就平。豫上心昏渝卽頓清。平則遠於巖牆。清則生於憂患。

〈十三〉成[1]るも渝る有り、咎无し。

昔[2]、穆王其の心を肆にせんと欲し、天下に周行して、將に皆必ず車轍馬迹[3]有らんとす。祭公謀父　祈招の詩を作りて、以て王の心を止[とど]む。王是を以て祇宮[4]に歿[5]するを獲たり。『傳[6]』に曰く、「人誰か過無からん、過ちて能く改むれ

ば、善焉より大なるは莫し。」聖人　人の、過有りて、之を初に改むる能はず、且つ將に其の非を遂げて反らざらんとするを慮るなり。之に教ふるに「成るも渝る有り、咎无し」を以てす。其の漸染の深き、放肆の久しきと雖も、而れども惕然として自ら省みれば、猶ほ以て敗亡に至らざるべし。以て夫の迷復の凶に覩ぶれば、同年にして論ずべからず。故に曰く、「惟れ狂も克く念へば聖と作る。」

〔汝成案ずるに〕訟の三は心　險渝りて卽ち平に就き、豫の上は心　昏渝りて卽ち頓に清。平なれば則ち巖牆より遠ざかり、清なれば則ち憂患を生ず。

（1）成有渝无咎　豫卦上六爻辭。
（2）昔穆……祇宮　『左傳』昭公十二年。
（3）迹　原據及び『原抄本日知錄』は「跡」に作る。
（4）歿　原據及び『原抄本日知錄』は「沒」に作る。
（5）祇　原據及び『原抄本日知錄』は「祗」に作る。
（6）傳　『左傳』宣公二年。
（7）迷復之凶　復卦上六象傳。
（8）惟狂克念作聖　『尙書』多方。
（9）訟三　「三」は「四」の誤か。訟卦九四爻辭に、「不克訟。復卦命。渝安貞。吉」とあり、象辭に、「復卦命。渝安貞。不失也」とある。

童觀

其在政教。則不能是訓是行。以近天子之光。而所司者。籩豆之事。其在學術。則不能知類通達。以幾大學之道。而所

習者。佔畢之文。樂師辨乎聲詩。故北面而弦。宗祝辨乎宗廟之禮。故後尸。商祝辨乎喪禮。故後主人。小人則无咎也。有大人之事。有小人之事。雖小道。必有可觀者焉。致遠恐泥。故君子爲之則吝也。

〈十四〉 童觀(1)

其の政教に在りては、則ち是れ訓ひ(2)是れ行ひ、以て天子の光に近づく能はず、而して司る所の者は、籩豆(3)の事。其の學術に在りては、則ち類(4)を知りて通達し、以て大學の道に幾づく能はず、而して習ふ所の者は、佔畢(5)の文。樂師(6)聲詩を辨ず、故に北面して弦ず。宗祝　宗廟の禮を辨ず、故に尸に後る。商祝　喪禮を辨ず、故に主人に後る。小人は則ち咎无きなり。大人の事有り、小人の事有り。小道(7)と雖も、必ず觀るべき者有るも、遠きを致すには恐らくは泥まん。故に君子之を爲せば則ち吝なり。

(1) 童觀　觀卦初六爻辭「童觀。小人无咎。君子吝。」象辭「初六。童觀。小人道也。」
(2) 是訓……之光　『尚書』洪範。
(3) 籩豆之事　『論語』泰伯「籩豆之事。則有司存。」
(4) 知類……之道　『禮記』學記「古之教者。家有塾。黨有庠。術有序。國有學。……九年知類通達。強立而不反。謂之大成。夫然後足以化民易俗。近者說服。而遠者懷之。此大學之道也。」
(5) 佔畢之文　『禮記』學記「今之教者。呻其佔畢。多其訊。」
(6) 樂師……主人　『禮記』樂記。
(7) 雖小……恐泥　『論語』子張「子夏曰。雖小道。必有可觀者焉。致遠恐泥。是以君子不爲也。」

不遠復

復之初九。動之初也。自此以前。喜怒哀樂之未發也。至一陽之生而動矣。故曰復其見天地之心乎。顏子體此。故有不善未嘗不知。知之未嘗復行。此愼獨之學也。回之爲人也。擇乎中庸。夫亦擇之於斯而已。是以不遷怒。不貳過。

〈十五〉 遠からずして復る

復の初九は、動の初なり。此より以前、喜怒哀樂の未だ發せざるなり。一陽の生ずるに至りて動く。故に曰く、「復は其れ天地の心を見るか。」顏子此を體す、故に不善有れば未だ嘗て知らずんばあらず、之を知れば未だ嘗て復びは行はず。此れ愼獨の學なり。回の、人と爲りや、中庸を擇ぶ。夫れ亦之を斯に擇ぶのみ。是を以て怒を遷さず、過を貳せず。

(1) 不遠復　復卦初九爻辭。
(2) 喜怒哀樂之未發　『中庸』。
(3) 復其見天地之心乎　復卦彖傳。
(4) 顏子……復行　繫辭傳下「子曰。顏氏之子。其殆庶幾乎。有不善未嘗不知。知之未嘗復行也。易曰。不遠復。无祇悔。元吉。」
(5) 回之……中庸　『中庸』。
(6) 不遷怒不貳過　『論語』雍也。

其在凡人。則復之初九。日夜之所息。平旦之氣。其好惡與人相近也者幾希。苟其知之。則擴而充之矣。故曰。復小而辨於物。

其の凡人に在りては、則ち復の初九のごとく、日夜(7)の息する所、平旦の氣、其の好惡　人と相近き者は幾(ほとん)ど希なり。苟も其れ之を知れば、則ち擴(8)げて之を充たす。故に曰く、「復(9)は小にして物を辨ず。」

(7) 日夜……幾希　『孟子』告子上。

(8) 擴而充之　『孟子』公孫丑上「凡有四端於我者。知皆擴而充之。」

(9) 復小而辨於物　繫辭傳下。

不耕穫。不菑畬。

楊氏曰。

〔原注〕誠齋易傳。

初九動之始。六二動之繼。是故初耕之。二穫之。初菑之。二畬之。天下無不耕而穫。不菑而畬者。其曰不耕不菑。則耕且菑。前人之所已爲也。昔者周公。毖殷頑民。遷於洛邑。密邇王室。既歷三紀。世變風移。而康王作畢命之書曰。惟周公克愼厥始。惟君陳克和厥中。惟公克成厥終。是故有周之治。垂拱仰成。而無所事矣。周監於二代。郁郁乎文

哉。而孔子之聖但曰。述而不作。信而好古。又曰。文武之道。未墜於地。在人。是故六經之業。集羣聖之大成。而無所㓝矣。雖然。使有始之作之者。而無終之述之者。是耕而弗穫。菑而弗畬也。其功爲弗竟矣。六二之柔順中正。是能穫能畬者也。故利有攸往也。未富者。因前人之爲。而不自多也。猶不富以其鄰之意。

〈十六〉 耕[1]さずして穫り、菑せずして畬す。

楊[2]氏曰く、

〔原注〕『誠齋易傳』

「初九は動の始、六二は動の繼。是の故に初めて之を耕して、之を二穫し、初めて之を菑して、之を二畬す。」天下、耕さずして穫り、菑せずして畬する者無し。其の「耕さず」「菑せず」と曰ふは、則ち耕し且つ菑すること、前人の已に爲す所なればなり。昔者、周[3]公、殷の頑民を𢿱(つつし)み、洛邑に遷し、王室に密邇し、既に三紀を歴て、世變はり風移る。而して康王 畢命の書を作りて曰く、「惟[4]れ周公克く厥の始を愼み、惟れ君陳克く厥の中を和す。惟れ公克く厥の終を成せ。」是の故に有周の治、垂[5]拱して成を仰ぎて、事とする所無し。周[6]は二代に監みて、郁郁乎として文なる哉。而して孔子の聖但曰く、「述[7]べて作らず、信じて古を好む。」又曰く、「文[8]武の道、未だ地に墜ちずして、人に在り。」是の故に六經の業は、羣聖の大成を集むるも、㓝る所無し。然りと雖も、使し之を始め之を作る者有りて、之を終へ之を述ぶる者無くんば、是れ耕すも穫らず、菑するも畬せざるなり。其の功、爲に竟へざればなり。六二の柔順中正、是れ能く穫り能く畬する者なり。故に「往く攸有るに利ある」なり。「未だ富まざる」者は、前人の爲せるに因りて、自ら多からざるなり、猶ほ富[9]むに其の鄰を以てせざるの意のごとし。

(1) 不耕穫不菑畬　无妄卦六二爻辭「不耕穫。不菑畬。則利有攸往。」象辭「不耕穫。未富也。」
(2) 楊氏　楊萬里。
(3) 周公……風移　『尚書』畢命（僞古文）。原據では、「密邇王室」下に「式化厥訓」句有り。
(4) 惟周……厥終　『尚書』畢命。
(5) 垂拱仰成　『尚書』畢命。
(6) 周監……文哉　『論語』八佾。
(7) 述而……好古　『論語』述而。
(8) 文武……在人　『論語』子張。これは子貢の發言。
(9) 富以其鄰　小畜卦九五爻辭。

天在山中

張湛注列子曰。自地以上皆天也。故曰。天在山中。

〈十七〉天(1)　山中に在り

張湛『列子(2)』に注して曰く、「地より以上、皆天なり。」故に曰く、「天　山中に在り。」

(1) 天在山中　大畜卦象傳。
(2) 列子　天瑞張湛注「夫天之蒼蒼。非鏗然之質。則所謂天者。豈但遠而無所極邪。自地而上。則皆天矣。故俯仰喘息。未始離天也。」

罔孚。裕无咎。

君子信而後諫。未信則以爲謗己也。而況初之居下位。未命於朝者乎。孔子嘗爲委吏矣。曰。會計當而已矣。嘗爲乘田矣。曰。牛羊茁壯長而已矣。此所謂裕无咎也。若受君之命。而任其事。有官守者。不得其職則去。有言責者。不得其言則去矣。

〔汝成案〕憂則違之。故豫二不終日貞吉。樂則行之。故晉初罔孚裕无咎。豫溺晏安。晉麗乎明也。

〈十八〉 孚罔[1]し、裕なれば咎无し。

君子は信ありて而る後諫む。未だ信あらざれば則ち以て己を謗ると爲すなり。而るを況んや初の、下位に居り、未だ朝に命ぜられざる者をや。孔子[2]嘗て委吏と爲る、曰く、「會計當たるのみ。」嘗て乘田と爲る、曰く、「牛羊　茁として壯長するのみ。」此れ所謂「裕なれば咎无き」なり。若し君の命を受けて、其の事に任ずれば、官守[3]有る者、其の職を得ざれば則ち去り、言責有る者、其の言を得ざれば則ち去る。

〔汝成案ずるに〕憂[4]ふれば則ち之に違ふ、故に豫[5]の二に、「日を終へず、貞なれば吉。」樂[6]しめば則ち之を行ふ、故に晉の初に、「孚罔し、裕なれば咎无し。」豫は晏安に溺れ、晉は明に麗くなり。

(1) 罔孚裕无咎　晉卦初六爻辭。象辭「裕无咎。未受命也。」　(2) 孔子……長而已矣　『孟子』萬章下。

（3）官守……言則去矣　『孟子』公孫丑下。なお、該句の後に、「我無官守。我無言責也。則吾進退。豈不綽綽然有餘裕哉」とある。

（4）憂則違之　乾卦文言傳。

（5）豫二　豫卦六二爻辭。

（6）樂則行之　乾卦文言傳。

有孚於小人

君子之於小人也。有知人則哲之明。有去邪勿疑之斷。堅如金石。信如四時。使憸壬之類皆知上志之不可移。豈有不革面而從君者乎。所謂有孚於小人者如此。

〈十九〉　小人[1]に孚有り

君子の、小人に於けるや、人[2]を知るは則ち哲、の明有り、邪[3]を去りて疑ふ勿れ、の斷有り。堅きこと金石の如く、信なること四時の如く、憸壬の類をして皆、上志の移すべからざるを知らしむ。豈面[4]を革めて君に從はざる者有らんや。所謂「小人に孚有る」者、此の如し。

（1）有孚於小人　解卦六五爻辭。

（2）知人則哲　『尚書』皐陶謨。

（3）去邪勿疑　『尚書』大禹謨（僞古文）。

（4）革面而從君　革卦上六象辭「小人革面。順以從君也。」

損其疾。使遄有喜。

損不善而從善者。莫尚乎剛。莫貴乎速。初九曰。已事遄往。六四曰。使遄有喜。四之所以能遄者。賴初之剛也。周公思兼三王以施四事。其有不合者。仰而思之。夜以繼日。幸而得之。坐以待旦。子路有聞。未之能行。惟恐有聞。其遄也至矣。文王之勤日昃。大禹之惜寸陰。皆是道也。君子進德修業。欲及時也。故爲政者玩歲而愒日。則治不成。爲學者日邁而月征。則身將老矣。

〔汝成案〕盱豫則悔。遲有悔。損疾則使遄有喜。荀子曰。其爲人多暇日者。其出入不遠矣。孟子曰。知其非義。斯速已矣。何待來年。

〈二十〉 其(1)の疾を損す、遄かならしめば喜有り

不善を損して善に從ふ者、剛より尚きは莫く、速かなるより貴きは莫し。初九に曰く、「事を已めて遄かに往く。」六四に曰く、「遄かならしめば喜有り。」四の能く遄かなる所以の者は、初の剛に賴るなり。周公(2)三王を兼ねて以て四事を施さんことを思ふ。其の合はざる有れば、仰ぎて之を思ひ、夜以て日に繼ぐ。幸にして之を得れば、坐して以て旦を待つ。子路(3)聞く有りて、未だ之を行ふ能はざれば、惟聞く有るを恐る。其の遄かなるや至れり。文王(4)の、日昃に勤むる、大禹(5)の、寸陰を惜しむ、皆是の道なり。君子(6)德に進み業を修む、時に及ぶを欲するなり。故に政を爲す者歲を玩(むさぼ)りて(7)日を愒ればば、則ち治　成らず。學を爲す者日(8)に邁きて月に征けば、則ち身　將に老いんとす。

〔汝成案ずるに〕盱豫[9]しては則ち悔ゆ、遲ければ悔有り。疾を損しては則ち遄かならしめば喜有り。[10]子曰く、「其の人と爲り暇日多き者は、其の、入（人）に出づること遠からず。」孟子[11]曰く、「其の義に非ざるを知れば、斯に速かに已めん、何ぞ來年を待たん。」

（1）損其疾使遄有喜　損卦六四爻辭。

（2）周公……待旦　『孟子』離婁下。

（3）子路……惟恐有聞　『論語』公冶長。原據は「惟」を「唯」に作る。

（4）文王之勤日昃　『尚書』無逸「文王卑服。卽康功田功。徽柔懿恭。懷保小民。惠鮮鰥寡。自朝至于日中昃。不遑暇食。用咸和萬民。」なお、『漢書』董仲舒傳に、「周文王至於日昃。不暇食」とあり、また、『後漢書』陳元傳に、「文王有日昃之勞。周公執吐握之恭。」とある。

（5）大禹之惜寸陰　『淮南子』原道訓に、「夫日回而月周。時不與人游。故聖人不貴尺之璧。而重寸之陰。時難得而易失也。禹之趨時也。履遺而弗取。冠挂而弗顧。非爭其先也。而爭其得時也」とあり、また、『晉書』陶侃傳に、「大禹聖者。乃惜寸陰。至于衆人。當惜分陰」とある。

（6）君子……時也　乾卦文言傳。原據では「修」を「脩」に作る。

（7）玩歲而愒日　『左傳』昭公元年「后子出而告人。曰。趙孟將死矣。主民。翫歲而愒日。其與幾何。」杜注「翫愒。皆貪也。」

（8）日邁而月征　『毛詩』小雅、節南山之什、小宛「我日斯邁。而月斯征。」

（9）盱豫……有悔　豫卦六三爻辭。

（10）荀子　『荀子』修身。原據では、「爲人」下に「也」字有り。なお、「出入」の「入」は、王先謙の集解に從って、「人」の譌と解すべきもの。

（11）孟子　『孟子』滕文公下。

召公之戒成王曰。宅新邑。肆惟王其疾敬德。疾之爲言。遄之謂也。故曰。雞鳴而起。孳孳爲善。

召公の、成王を戒めて曰く、「新[12]邑に宅り、肆に惟れ王其れ疾く德を敬め。」疾の言爲る、遄の謂なり。故に曰く、「雞[13]鳴きて起き、孳孳として善を爲す。」

(12) 宅新……敬德　『尙書』召誥。

(13) 雞鳴……爲善　『孟子』盡心上「雞鳴而起。孳孳爲善者。舜之徒也。雞鳴而起。孳孳爲利者。跖之徒也。」

上九弗損益之

有天下而欲厚民之生。正民之德。豈必自損以益人哉。不違農時。穀不可勝食也。數罟不入洿池。魚鼈不可勝食也。斧斤以時入山林。材木不可勝用也。所謂弗損益之者也。皇建其有極。斂時五福。用敷錫厥庶民。詩曰。奏格無言。時靡有爭。是故君子不賞而民勸。不怒而民威於鈇鉞。所謂弗損益之者也。以天下爲一家。中國爲一人。其道在是矣。

〔錢氏曰〕惠而不費。則其惠可久。其惠亦可大。故曰。弗損益之。大得志也。

〈二十一〉上九[1]　損せずして之を益す

天下を有ちて、民[2]の生を厚くし、民の德を正さんと欲せば、豈必ずしも自ら損して以て人を益せんや。農[3]時に違はざ

れば、穀勝げて食ふべからざるなり。數罟　洿池に入らざれば、魚鼈勝げて食ふべからざるなり。斧斤　時を以て山林に入れば、材木勝げて用ふべからざるなり。所謂「損せずして之を益する」者なり。皇[4]其の有極を建て、時の五福を斂め、用て厥の庶民に敷錫す。『詩』[5]に曰く、「奏格して言ふ無く、時に爭ふ有る靡し。」是の故に君子は賞せずして民勸み、怒らずして民　鈇鉞より威る。所謂「損せずして之を益する」者なり。天[6]下を以て一家と爲し、中國を一人と爲すは、其の道是に在り。

〔錢[7]氏曰く〕惠にして費せざれば、則ち其の惠　久しかるべく、其の惠亦大なるべし。故に曰く、「損[8]せずして之を益すとは、大いに志を得るなり。」

(1) 上九弗損益之　損卦上九爻辭。
(2) 厚民之生正民之德　『左傳』文公七年に、「正德利用厚生。謂之三事」とあり、『尚書』大禹謨（僞古文）に、「正德利用厚生惟和」とある。
(3) 不違……用也　『孟子』梁惠王上。
(4) 皇建……庶民　『尚書』洪範。
(5) 詩曰……鈇鉞　『中庸』。「奏格」は、『中庸』では「奏假」に作り、商頌、烈祖では「鬷假」に作る。
(6) 以天……一人　『禮記』禮運「故聖人耐以天下爲一家。以中國爲一人者。非意之也。」
(7) 錢氏　錢大昕。出典未詳。
(8) 弗損……志也　損卦上九象辭。

利用爲依遷國

北大文学部紀要

在無事之國而遷。晉從韓獻子之言。而遷於新田。是也。在有事之國而遷。楚從子西之言。而遷於鄀。是也。皆中行告公之益也。

〈二十二〉 用(1)て依を爲し國を遷すに利あり

事無きの國に在りて遷るは、晉(2) 韓獻子の言に從ひて、新田に遷る、是れなり。事有るの國に在りて遷るは、楚(3) 子西の言に從ひて、鄀に遷る、是れなり。皆「中行なれば公に告ぐる」の益なり。

(1) 利用爲依遷國　益卦六四爻辭「中行告公從。利用爲依遷國。」

(2) 晉從……新田　『左傳』成公六年。

(3) 楚從……於鄀　『左傳』定公六年。

妬

天下之生久矣。一治一亂。盛治之極。而亂萌焉。此一陰遇五陽之卦也。孔子之門。四科十哲。身通六藝者。七十有二人。於是刪詩書。定禮樂。贊周易。修春秋。盛矣。而老莊之書。卽出於其時。後漢立辟雍養三老。臨白虎論五經。太學諸生。至三萬人。而三君八俊八顧八及八廚。爲之稱首。馬鄭服何之注。經術爲之大明。而佛道之敎。卽興於其世。

〔原注〕胡三省曰。道家雖宗老子。而西漢以前。未嘗以道士自名。至東漢。始有張道陵于吉等。是道與佛敎皆起

於東漢之時。

是知邪說之作。與世升降。聖人之所不能除也。故曰。繫于金柅。柔道牽也。嗚呼。豈獨君子小人之辨而已乎。

〔汝成案〕姤。遇也。不期而會曰遇。初陽曰復。意中之望也。初陰曰姤。意外之變也。陽四始曰大壯。陰一已曰女壯。其詞危矣。

〈二十三〉 姤

天下[1]の生は久し、一治一亂す。盛治の極にして、亂萌す。此れ一陰　五陽に遇ふの卦なり。孔子の門、四科[2]十哲、身[3]六藝に通ずる者、七十有二人。是に於て『詩』『書』を刪し、禮樂を定め、『周易』を贊し、『春秋』を修し、盛なり。而るに老莊の書、卽ち其の時に出づ。後漢、辟雍[4]を立てて三老を養ひ、白虎[5]に臨んで五經を論じ、太學[6]の諸生、三萬人に至る。而して三君[7]・八俊・八顧・八及・八廚、之を稱首と爲し、馬・鄭・服・何の注、經術　之を大明と爲す。而るに佛道の敎、卽ち其の世に興る。

〔原注〕胡[8]三省曰く、「道家　老子を宗とすと雖も、而れども西漢以前、未だ嘗て道士を以て自ら名づけず。東漢に至り、始めて張道陵・于吉等有り。是れ道と佛敎と皆東漢の時に起る。」

是れ邪說の作るは、世と升降し、聖人の除く能はざる所なるを知るなり。故に曰く、「金柅[9]に繫ぐとは、柔の道　牽かるるなり。」嗚呼、豈獨り君子小人の辨のみならんや。

〔汝成案ずるに〕姤[10]は遇なり。期せずして會ふを遇と曰ふ。初陽を復と曰ふ、意中の望なり。初陰を姤と曰ふ、意外の變なり。陽四にして始めて大壯と曰ひ、陰一にして已に女壯[11]と曰ふ。其の詞　危なり。

(1) 天下……一亂　『孟子』滕文公下。
(2) 四科十哲　『論語』先進。
(3) 身通……二人　『史記』孔子世家「孔子以詩書禮樂教。弟子蓋三千焉。身通六藝者。七十有二人。」
(4) 立辟雍養三老　『後漢書』儒林傳「建武元年。乃修起太學。……中元元年。初建三雍。明帝卽位。親行其禮。天子始冠通天。衣日月。備法物之駕。盛淸道之儀。坐明堂而朝羣后。登靈臺以望雲物。袒割辟雍之上。尊養三老五更。」また、『後漢書』光武帝紀及び明帝紀にも見える。
(5) 臨白虎論五經　『後漢書』儒林傳「建初中。大會諸儒於白虎觀。考詳同異。連月乃罷。肅宗親臨稱制。如石渠故事。顧命史臣。著爲通義。」また、『後漢書』章帝紀にも見える。
(6) 太學諸生至三萬人　『後漢書』儒林傳「本初元年。梁太后詔曰。大將軍下至六百石。悉遣子就學。每歲輒於鄉射月一饗會之。以此爲常。自是遊學增盛。至三萬餘生。」
(7) 三君……八廚　『後漢書』黨錮傳序「自是正直廢放。邪枉熾結。海內希風之流。遂共相標搒。指天下名士。爲之稱號。上曰三君。次曰八俊。次曰八顧。次曰八及。次曰八廚。猶古之八元八凱也。」
(8) 胡三省　出典未詳。
(9) 繫于金柅柔道牽也　姤卦初六象辭。
(10) 姤遇也　姤卦象傳「姤。遇也。柔遇剛也。」
(11) 女壯　姤卦卦辭「姤。女壯。勿用取女。」

包无魚

國猶水也。民猶魚也。幽王之詩曰。魚在于沼。亦匪克樂。潛雖伏矣。亦孔之昭。憂心慘慘。念國之爲虐。秦始皇八年。河魚大上。五行志以爲魚陰類。民之象也。逆流而上。言民不從君爲逆行也。自人君有求多於物之心。於是魚亂於下。鳥亂於上。而人情之所嚮。必有起而收之者矣。

〈二十四〉　包[1]に魚无し

國は猶ほ水のごときなり、民は猶ほ魚のごときなり。幽[2]王の詩に曰く、「魚　沼に在り、亦克く樂しむに匪ず。潛り伏すと雖も、亦孔だ之れ昭[3]かなり。憂心慘慘たり、國の、虐を爲すを念ふ。」秦始皇八年、河魚大いに上る。五[4]行志、以爲へらく、魚は陰類、民の象なり、逆流して上るは、民　君に從はずして逆行を爲すを言ふなり。人君　多きを物に求むるの心有るより、是に於て魚　下に亂れ、鳥[5]　上に亂る。而して人情の嚮ふ所、必ず起ちて之を收むる者有り。

（1）包无魚　　姤卦九四爻辭「包无魚。起凶。」象辭「无魚之凶。遠民也。」

（2）幽王之詩　　小雅、節南山之什、正月。序「正月。大夫刺幽王也。」

（3）昭　　原據では「焰」に作る。

（4）五行志　　『漢書』五行志中之下「史記秦始皇八年。河魚大上。劉向以爲近魚孽也。是歲。始皇弟長安君將兵擊趙。反。死屯留。軍吏皆斬。遷其民於臨洮。明年有嫪毐之誅。魚陰類。民之象。逆流而上者。民將不從君令爲逆行也。」

（5）鳥亂于上　　『漢書』五行志に鷄孽・羽蟲孽の記述が見える。

以杞包瓜

〔汝成案〕瓜者外延云云。司馬彪續漢書五行志文。今曰劉昭。當是續漢二字之誤。

劉昭五行志曰。瓜者外延。離本而實。女子外屬之象。一陰在下。如瓜之始生。勢必延蔓而及於上。五以陽剛居尊。如

樹杞然。

〔原注〕詩南山有杞。陸璣曰。杞山材也。其樹如樗。左傳所謂杞梓皮革。

使之無所緣而上。故曰。以杞包瓜。孔子曰。惟女子與小人爲難養也。顰笑有時。恩澤有節。器使有分。而國之大防。不可以踰。何有外戚宦官之禍乎。

〔姚刑部曰〕以人君之道言之。則以道率民。以禮防民。猶之植杞。而事變無窮。不曲而爲之備。是爲含章。〔又曰〕古苞苴用諸魚肉。程傳以釋包有魚。是也。恐未可以言諸瓜。且杞葉非可爲匏者。詩曰。無踰我里。無折我樹杞。然則植杞以衞田里。是爲包焉耳。〔沈明經曰〕惠氏以包有魚爲庖。此爲匏。陳義雖古遜。是閎深。

〈二十五〉 杞[1]を以て瓜を包む

〔汝成案ずるに〕「瓜者外延云云」は、司馬彪『續漢書』五行志の文。今「劉昭」と曰ふ、當に是れ「續漢」の二字の誤なるべし。

劉昭の五行志[2]に曰く、「瓜は外に延び、本を離れて實る。女子　外に屬するの象。」一陰　下に在るは、瓜の始めて生ずるが如し。勢、必ず延蔓して上に及ぶ。五は陽剛を以て尊に居り、杞を樹うるが如く然り。

〔原注〕『詩[3]』に「南山に杞有り。」陸璣[4]曰く、杞は山材なり、其の樹は樗の如し。『左傳[5]』に所謂「杞梓・皮革。」之をして緣りて上る所無からしむ。故に曰く、「杞を以て瓜を包む。」孔子[6]曰く、「惟[7]だ女子と小人とは養ひ難しと爲すなり。」顰笑[8]　時有り、恩澤　節有り、器使[9]　分有りて、國の大防、以て踰ゆべからず。何ぞ外戚宦官の禍有らんや。

〔姚刑部[10]曰く〕「人君の道を以て之を言へば、則ち道を以て民を率ゐ、禮を以て民を防ぐは、猶ほ之れ杞を植うるがごとし。而して事變は窮り無し、曲ならずして之が備を爲す、是れ「章を含む」と爲す。」

〔又曰く〕「古、苞苴　諸を魚肉に用ふ。『程傳』以て「包有魚」を釋するは、是なり。恐らくは未だ以て諸を瓜に言ふべからず。且つ杞葉は苞と爲すべき者に非ず。『詩[11]』に曰く、我が里を踰ゆる無かれ、我の樹ゑし杞を折る無かれ、と。然らば則ち杞を植ゑて以て田里を衞す、是れ包と爲すのみ。」

〔沈明經[12]曰く〕「惠氏[13]　「包有魚」を以て庖と爲す。此に匏と爲すは、陳義　古遜なりと雖も、是れ閎深。」

(1) 以杞包瓜　　姤卦九五爻辭「以杞包瓜。含章。有隕自天。」

(2) 五行志　『後漢書』五行志二「安帝元初三年。有瓜異本共生。八瓜同蔕。時以爲嘉瓜。或以爲瓜者外延。離本而實。女子外屬之象也。」

(3) 詩　小雅、南有嘉魚之什、南山有臺。

(4) 陸璣　孔疏所引陸璣疏「其樹如樗。一名狗骨。」

(5) 左傳　襄公二十六年。

(6) 孔子　『論語』陽貨。

(7) 惟　原據は「唯」に作る。

(8) 顰笑　『韓非子』內儲說上「吾聞。明主愛一嚬一笑。嚬有爲嚬。而笑有爲笑。」

(9) 器使　『論語』子路「君子易事而難說也。說之不以道。不說也。及其使人也。器之。」

(10) 姚刑部　姚鼐。出典未詳。

(11) 詩　鄭風、將仲子。

(12) 沈明經　沈宇。出典未詳。

(13) 惠氏　惠棟。出典未詳。

已日

革。已日乃孚。六二。已日乃革之。朱子發讀爲戊己之己。天地之化。過中則變。日中則昃。月盈則食。故易之所貴者中。十干則戊己爲中。至於己。則過中而將變之時矣。故受之以庚。庚者。更也。天下之事。當過中而將變之時。然後革。而人信之矣。古人有以己爲變改之義者。儀禮少牢饋食禮。日用丁己。注內事用柔日。必丁己者。取其令名。自丁甯。自變改。皆爲謹敬。而漢書律歷志亦謂理紀於己。斂更於庚。是也。

〔原注〕納甲之法。革下卦離納己。

王弼謂卽日不孚。已日乃孚。以已爲已事遄往之已。恐未然。

〔楊氏曰〕按。白虎通云。已者。起也。〔汝成案〕已日革之。程傳義極正大。納甲之說。先生所斥。乃欲以此破舊說。徒好異耳。漢人亦無以此訓革彖者。革是改命。與幹蠱異。非過中之謂也。

＜二十六＞　已日

「革。[1]已日乃孚。」「六二。已日乃革之。」[2]朱子發[3]讀んで戊己の己と爲す。天地の化、中を過ぐれば則ち變ず。日[4]中すれば則ち昃き、月　盈つれば則ち食す。故に易の貴ぶ所の者は中。十干は則ち戊己を中と爲す。己に至れば、則ち中を過ぎて將に變ぜんとするの時なり。故に之を受くるに庚を以てす。庚とは、更なり。天下の事　中を過ぎて將に變ぜんとするの時に當たり、然る後、革め、而して人之を信ず。古人　己を以て變改の義と爲す者有り。『儀禮』少牢饋食禮に、「日は丁己を用ふ。」注に、「內事は柔の日を用ふ。必ず丁己なる者は、其の令名に取る。自ら丁甯、自ら變改、皆、謹敬と爲す。」而して『漢書』[5]律歷志にも、亦「己に理紀し、庚に斂更す」と謂ふ、是れなり。

〔原注〕納甲の法、革の下卦の離　己を納る。

王弼、「卽日は孚ならず、已む日乃ち孚なり」と謂ひ、已を以て「已事遄往」[6]の已と爲す。恐らくは未だ然らず。

〔楊氏曰く〕[7]按ずるに、『白虎通』[8]に云ふ、「己とは、起なり。」

〔汝成案ずるに〕[9]已日、之を革むは、『程傳』の義、極めて正大。納甲の說は、先生の斥くる所。乃ち此を以て舊說を破らんと欲するは、徒に異を好むのみ。漢人も亦此を以て革の彖を訓ずる者無し。革は是れ改命、幹蠱と異なり、中を過ぐるの謂に非ざるなり。

(1) 革已日乃孚　革卦卦辭。

(2) 六二已日乃革之　革卦六二爻辭。

(3) 朱子發　『漢上易傳』卷五「已日。先儒讀作已事之已。當讀作戊己之己。」

(4) 日中……則食　豐卦彖傳。

(5) 漢書律歷志　『漢書』律歷志上「出甲於甲。奮軋於乙。明炳於丙。大盛於丁。豐楙於戊。理紀於己。斂更於庚。悉新於辛。懷任於壬。陳揆於癸。」

(6) 已事遄往　損卦初九爻辭。

(7) 楊氏　楊名宁。出典未詳。

(8) 白虎通　五行篇「己者物必起。」

(9) 汝成　黃氏が私淑鑽仰して捨かざる顧氏の說を駁しているのは、甚だ興味深い。言わば「仁に當たりては師にも讓らず」であろうか。蛇足めくが、『儀禮』少牢饋食に所謂「日用丁己」の「丁己」は、すでに盧文弨・盛世佐等々の諸家が指摘している所だが、「丁巳」と解すべきものと考えられる。

改命吉

革之九四。猶乾之九四。諸侯而進乎天子。湯武革命之爻也。故曰。改命吉。成湯放桀於南巢。惟有慙德。是有悔也。天下信之。其悔亡矣。四海之內皆曰。非富天下也。爲匹夫匹婦復讎也。故曰。信志也。

〔陸學博曰〕革而信之。信不待革也。若既革而信。是未信而動矣。

〈二十七〉　命を改むれば吉

革(1)の九四は、猶ほ乾の九四のごとし、諸侯にして天子に進む、湯武　命を改むるの爻なり。故に曰く、「命を改むれば吉。」成湯(2)　桀を南巢に放ち、惟れ德に慙づる有り。是れ悔有るなり。天下之を信じ、其の悔亡ぶ。四(3)海の內皆曰く、天下を富とするに非ざるなり、匹夫匹婦の爲に讎を復するなり、と。故に曰く、「志を信ずるなり。」

〔陸學博(4)曰く〕革めて之を信ずるは、信ずること革むるを待たざるなり。若し既に革めて信ずれば、是れ未だ信あらずして動くなり。

(1) 革之九四　爻辭「悔亡。有孚改命。吉。」象辭「改命之吉。信志也。」

(2) 成湯……慙德　『尙書』仲虺之誥（僞古文）。

(3) 四海……讎也　『孟子』滕文公下。

(4) 陸學博　陸珣。出典未詳。

艮

毋意。毋必。毋固。毋我。艮其背。不獲其身也。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。行其庭。不見其人也。

〈二十八〉 艮(1)

意(2)毋く、必毋く、固毋く、我毋きは、「其の背に艮(とど)まり、其の身を獲ざる」なり。富貴(3)も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はざるは、「其の庭に行いて、其の人を見ざる」なり。

(1) 艮　艮卦卦辭「艮其背。不獲其身。行其庭。不見其人。无咎。」

(2) 毋意……毋我　『論語』子罕。

(3) 富貴……能屈　『孟子』滕文公下。

艮其限

學者之患。莫甚乎執一而不化。及其施之於事。有扞格而不通。則忿懥生。而五情瞀亂。與衆人之滑性而焚和者。相去蓋無幾也。孔子惡果敢而窒者。非獨處事也。爲學亦然。告子不動心之學。至於不得於言。勿求於心。而孟子以爲其弊必將如蹶趨者之反動其心。此艮其限。列其貪之說也。君子之學不然。廓然而大公。物來而順應。故聞一善言。見一善行。若決江河沛然。莫之能禦。而無熏心之厲矣。

〈二十九〉 其[1]の限に艮まる

學者の患は、一[2]を執りて化せざるより甚だしきは莫し。其の之を事に施すに及び、扞格して通ぜざる有れば、則ち忿[3]懥生じて、五情 瞀亂す。衆人の、性[4]を滑(みだ)して和[5]を焚する者と、相去ること蓋し幾(いくばく)も無きなり。孔子[6] 果敢にして窒がる者を惡めるは、獨り事を處するのみに非ざるなり、學を爲すも亦然り。告子[7]の不動心の學、「言に得ざれば、心に求むる勿れ」に至りて、孟子以爲へらく、其の弊必ず將に蹶き趨る者の反つて其の心を動かすが如くならんとす、と。此れ「其の限に艮まり、其の夤を列(さ)く」の說なり。君子の學は然らず。廓[8]然として大公、物來りて順應す。故に一[9]善言を聞き、一善行を見れば、江河を決して沛然たるが若く、之を能く禦むる莫く、而して心を熏[10]ずるの厲無し。

(1) 艮其限　艮卦九三爻辭「艮其限。列其夤。厲薰心。」

(2) 執一　『孟子』盡心上「楊子取爲我。拔一毛而利天下不爲也。墨子兼愛。摩頂放踵利天下爲之。子莫執中。執中爲近之。執中無權。猶執一也。所惡執一者。爲其賊道也。舉一而廢百也。」

(3) 忿懥　『大學』「所謂脩身在正其心者。身有所忿懥。則不得其正。」

(4) 滑性　『莊子』繕性「繕性於俗學。以求復其初。滑欲於俗思。以求致其明。謂之蔽蒙之民。」

(5) 焚和　『莊子』外物「慰暨沈屯。利害相摩。生火甚多。衆人焚和。」

(6) 孔子……窒者　『論語』陽貨。

(7) 告子……其心　『孟子』公孫丑上「敢問。夫子之不動心。與告子之不動心。可得聞與。告子曰。不得於言。勿求於心。不得於心。勿求於氣。不得於心。勿求於氣。可。不得於言。勿求於心。不可。……志壹則動氣。氣壹則動志。今夫蹶者趨者是氣也。而反動其心。」

(8) 廓然……順應　『明道文集』卷三、答横渠先生定性書「夫天地之常。以其心普萬物而無心。聖人之常。以其情順萬事而無情。故君子之學。莫若廓然而大公。物來而順應。」

(9) 聞一……能禦　『孟子』盡心上。

(10) 熏　原據では「薰」に作る。

慈谿黃氏

〔原注〕震。

日鈔曰。心者。吾身之主宰。所以治事。而非治於事。惟隨事謹省。則心自存。不待治之而後齊一也。孔子之教人曰。居處恭。執事敬。與人忠。曾子曰。吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。不待言心。而自貫通於動靜之間者也。孟子不幸當人欲橫流之時。始單出而爲求放心之說。然其言曰。君子以仁存心。以禮存心。則心有所主。非虛空以治之也。

〔錢氏曰〕孟子言。學問之道無他。求其放心而已矣。不求學問。而求放心。此釋氏之學也。至於齋心服形之老莊。一變而爲坐脫立忘之禪學。乃始瞑目靜坐。日夜仇視其心。而禁治之。及治之愈急。而心愈亂。則曰。易伏猛獸。難降寸心。嗚呼。人之有心。猶家之有主也。反禁切之。使不得有爲。其不能無擾者勢也。而患心之難降歟。

〔原注〕省齋記。

又曰。夫心之說有二。古人之所謂存心者。存此心於當用之地也。後世之所謂存心者。攝此心於空寂之境也。造化流行。無一息不運。人得之以爲心。亦不容一息不運。心豈空寂無用之物哉。世乃有游手浮食之徒。株坐攝念。亦曰存心。而士大夫溺於其言。亦將遺落世事。以獨求其所謂心。迨其心迹冰炭。物我參商。所謂老子之弊。流爲申韓者。一人之身。已兼備之。而欲尤人之不我應。得乎。

〔原注〕山陰縣主簿廳記。

此皆足以發明厲熏心之義。

〔原注〕詳又見第二十三卷心學條下。

乃周公已先繫之於易矣。

慈谿の黄氏の

〔原注〕震。

『日鈔』[11]に曰く、心は、吾が身の主宰、事を治むる所以にして、事に治められるに非ず。惟だ事に隨ひて謹み省みれば、則ち心自ら存す。之を治め而る後、齊一なるを待たざるなり。孔子の、人に教ふるに曰く、「居處[12]は恭、事を執りて敬、人と忠。」曾子曰く、「吾[13]日に吾が身を三省す。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。傳へて習はざるか。」心を言ふを待たずして、自ら動靜の間に貫通する者なり。孟子は不幸にして人欲横流の時に當たり、始めて單出して「放心[14]を求むる」の說を爲す。然れども其の言に曰く、「君子[15]は仁を以て心を存し、禮を以て心を存す。」則ち心　主とする所有りて、虛空以て之を治むるに非ざるなり。

〔錢氏[16]曰く〕孟子言ふ、「學問の道は他無し、其の放心を求むるのみ。」學問を求めずして、放心を求むる、此れ釋氏の學なり。

心[17]を齋し形を服するの老莊に至りては、一變して坐脫立忘[18]（亡）の禪學と爲る。乃ち始めて瞑目靜坐し、日夜其の心を仇視して、之を禁治す。之を治むること愈〻急にして、心愈〻亂るるに及んでは、則ち曰く、「猛獸[19]を伏し易く、

寸心を降し難し。」嗚呼、人の、心有るは、猶ほ家の、主有るがごときなり。反つて之を禁切し、爲す有るを得ざらしむ。其の擾るる無き能はざる者は勢なり、而るを心の降し難きを患へんや。

〔原注〕省齋記。

又曰く、夫れ心の說に二有り。古人の所謂存心は、此の心を當用の地に存するなり。後世の所謂存心は、此の心を空寂の境に攝むるなり。造化の流行、一息として運らざる無し。人之を得て以て心と爲せば、亦容に一息として運らざるべからず。心は豈空寂無用の物ならんや。世乃ち游手浮食の徒有り、株坐攝念し、亦存心と曰ふ。而して士大夫其の言に溺れ、亦將に世事を遺落して、以て獨り其の所謂心を求めんとす。其の心迹は冰炭、物我は參商なるに迨ぶ。所謂老子の弊、流れて申韓と爲る者なり。一人の身、已に之を兼備せるに、而れども人の、我に應ぜざるを尤めんと欲す、得んや。

〔原注〕山陰縣主簿廳記。

此れ皆以て「厲ふくして心を熏ず」の義を發明するに足る。

〔原注〕詳くは又第二十三卷「心學」の條下に見ゆ。

乃ち周公已に先に之を易に繫く。

(11) 日鈔　卷八十六。ここの引用文と原據（四庫全書本）との閒には、字句の異同が頗る多い。對應部分の原據の全文を示せば、以下の通り。「心者。吾身之主宰。靈明廣大。與造化相流通。所以治事。而非治於事。惟隨事謹省。則心自存正。不待治之而後齊一也。危微精一之語。萬世道學之源。要不過求所謂中者而執之。故自數聖人而傳之。孔子惟曰。居處恭。執事敬。與人忠。則心不待言。而自貫通於動靜之閒。曾子親得孔子之傳亦惟曰。謀不忠乎。交不信乎。傳不習乎。將

心不待言。而自昭徹於流行之際。孟子不幸當人欲橫流之時。始單出而爲求放心之說。然嘗言曰。君子以仁存心。則心有所主。非虛空以治心爲可知。至於齋心服形之老莊。一漲而爲坐脫立忘之禪學。始瞑目株坐。日夜仇視其心。而禁治之。及治之愈急。而心愈亂。則曰。易伏猛獸。難降寸心。嗚呼。人之有心。猶家之有主也。家有主。反禁切之。使一不有爲。其擾者勢也。而訝心之難降與。」

(12) 居處……人忠　『論語』子路。

(13) 吾日……習乎　『論語』學而。

(14) 求放心　『孟子』告子上「人有雞犬放。則知求之。有放心。而不知求。學問之道無他。求其放心而已矣。」

(15) 君子……禮存心　『孟子』離婁下。

(16) 錢氏　錢大昕。出典未詳。

(17) 齋心服形　『列子』黃帝に、「朕閒居三月。齋心服形。思有以養身治物之道。弗獲其術」とある。

(18) 坐脫立忘　底本及び原據の「忘」は、「亡」の譌。原抄本は誤らず。坐脫立亡は、『普勸坐禪儀』・『碧巖錄』八十則・『景德傳燈錄』卷三十などに見え、坐ったままで死に、立ったままで死ぬ意。

(19) 易伏……寸心　出典未詳。

(20) 又曰　『黃氏日鈔』卷八十七。ここの引用文と原據との閒には、字句の異同が頗る多い。對應部分の原據の全文を示せば、以下の通り。「夫心之說有二。古人之所謂存心者。專此心於當用之地也。後世之所謂存心者。攝此心於空寂之境也。造化流行。無一息不運。人得之以爲心。心卽造化也。亦不容一息不運。心豈空寂無用之物哉。心之德爲仁。仁之施爲愛。以之親親。而親以睦。以之仁民。而民以化。以之愛物。而物以育。感無不應。理有固然。如君所得於越之人士。亦明效之芽甲矣。世乃有游手浮食之徒。株坐攝念。亦曰存心。而外照其所以親親仁民愛物者。是旣失心之良。固無足責。柰何。士大夫習溺於見聞之久。歆動空虛之文。亦將遺落世事。而獨求其所謂心。迨其心迹冰炭。物我參商。作之不應。刑罰滋章。所謂老子之弊。流爲申韓者。一人之身。已兼備如是。尤人之不我應。得乎。」

(21) 老子……申韓　出典未詳。

(22) 山陰縣主簿廳記　原據は「山陰縣重建主簿廳記」に作る。

(23) 第二十三卷心學　『原抄本日知錄』では第二十卷。本稿底本『日知錄集釋』では第十八卷。

鴻漸于陸

上九。鴻漸于陸。其羽可用爲儀。吉。安定胡氏改陸爲逵。

〔原注〕鼂氏曰。其說出於毗陵從事范諤昌。按。宋史藝文志。諤昌有證墜簡一卷。

朱子從之謂合韻。非也。詩儀字凡十見。

〔原注〕柏舟。相鼠。東山。湛露。菁菁者莪。斯干。賓之初筵。既醉。各一見。抑二見。

皆音牛何反。不得與逵爲叶。

〔江氏曰〕以韻讀之。陸當作阿。大陵曰阿。九五爲陵。則上九爲阿。阿儀相叶。菁菁者莪。是也。

而雲路亦非可翔之地。仍當作陸爲是。漸至於陵而止矣。不可以更進。故反而之陸。古之高士。不臣天子。不友諸侯。而未嘗不踐其土。食其毛也。其行高於人君。而其身則與一國之士偕焉而已。此所以居九五之上。而與九三同爲陸象也。朱子發曰。上所往進也。所反亦進也。漸至九五極矣。是以上反而之三。楊廷秀曰。九三下卦之極。上九上卦之極。故皆曰陸。自木自陵。而復至於陸。以退爲進也。巽爲進退。其說並得之。

〔姚刑部曰〕漸以進爲德者也。無應與。則困莫能進。居卦之終。則窮蔑可進矣。故九三上九皆爲鴻漸于陸。失其所而無所往之象也。然九三凶。上九吉者。三居臣子之位。雖不得于君。而義不可去。叔肸子臧子家駒屈平之倫。是也。上之位固處乎事外。則吾進退。豈不綽綽然有餘裕哉。雖然。鴻居于水澤飲食游浮者。吉之常也。若以其羽爲儀。于用則尊。而鴻死矣。孔子曰。其羽可用爲儀。天下雖亂。而吾之道不可亂也。贊易。述詩書禮樂。作春秋。以遺後聖。是爲吉而已矣。

〈三十〉　鴻　陸に漸む

「上九[1]、鴻　陸に漸む、其の羽　用ひて儀と爲すべし、吉。」安定[2]の胡氏　陸を改めて逵に爲る。

〔原注〕鼂[3]氏曰く、「其の說　毗陵の從事、范諤昌に出づ。」按ずるに、『宋史』藝文志、諤昌『證墜簡』一卷有り。

朱子[4]　之に從ひ韻を合すと謂ふは、非なり。『詩』に、儀の字凡そ十見す。

〔原注〕柏舟、相鼠、東山、湛露、菁菁者莪、斯干、賓之初筵、既醉、各〻一見す。抑、二見す。皆、音牛何の反、逵と叶と爲すを得ず。

〔江[5]氏曰く〕韻を以て之を讀むに、陸　當に阿に作るべし。大陵を阿と曰ふ。九五　陵と爲せば、上九　阿と爲す。阿儀　相叶ふ。菁菁者莪、是れなり。

而して雲[6]路も亦翔るべきの地に非ず。仍ほ當に陸に作るを是と爲すべし。漸んで陵に至りて止まる。以て更に進むべからず、故に反りて陸に之く。古の高士、天[7]子に臣たらず、諸侯を友とせず、未だ嘗て其[8]の土を踐み、其の毛を食はざるなり。其の行　人君より高くして、其の身は則ち一國の士と偕にするのみ。此れ九五の上に居りて、九三と同じく陸の象と爲す所以なり。朱[9]子發曰く、「上の往く所は進なり、反る所も亦進なり。漸むこと九五に至りて極まる、是を以て上反りて三に之く。」楊[10]廷秀曰く、「九三は下卦の極、上九は上卦の極。故に皆、陸と曰ふ。木よりし陵よりして、復た陸に至る。退を以て進と爲すなり。巽を進退と爲す。」其の說並びに之を得たり。

〔姚[11]刑部曰く〕漸は進を以て德と爲す者なり。應與無ければ、則ち困みて能く進む莫し。卦の終りに居れば、則

ち窮りて進むべき蔑し。故に九三、上九、皆「鴻　陸に漸み」、其の所を失ひて往く所無きの象と爲すなり。然れども九三　凶にして、上九　吉なる者は、三は臣子の位に居り、君に得ずと雖も、而れども義として去るべからず。叔肸・子臧・子家駒・屈平の倫、是れなり。上の位　固より事外に處れば、則ち[12]吾が進退、豈綽綽然として餘裕有らざらんや。然りと雖も、鴻　水澤に居りて飲食游浮する者、吉の常なり。若し其の羽を以て儀と爲せば、用においては則ち尊きも、鴻は死す。[13]孔子曰く、「其の羽　用ひて儀と爲すべし、とは、天下亂ると雖も、而れども吾の道は亂るべからざるなり。」『易』を贊し、『詩』『書』禮樂を述べ、『春秋』を作りて、以て後聖に遺す、是れ吉と爲すのみ。

(1) 上九……儀吉　漸卦上九爻辭。

(2) 安定胡氏　胡瑗『周易口義』卷九「按。漸卦自下而漸于上。自微而至于高大。且陵者未爲極高之地。豈有反下之義哉。今考于經文。陸字當爲逵字。蓋典籍傳文。字體相類。而錄之誤也。逵者。雲路也。言鴻之飛高。至于雲路。其羽翎毛質。可以爲表儀。亦猶賢人君子。自下位而登公輔之列。功業隆盛。崇高遠大。可以爲天下之儀表。故獲吉也。按。輔嗣之意。亦解爲雲路之義。言雖進處高潔。不累于職。巍巍清遠。若止在高平之陸。安得有高潔巍巍清遠之象哉。以此推之。是傳錄之際。誤書此逵爲陸字也。明矣。」

(3) 龜氏　『郡齋讀書志』卷一「證墜簡。一卷。右皇朝天禧中毗陵從事建溪范諤昌撰。其書酷類郭京舉正。如震卦彖辭內。云脫不喪匕鬯四字。程正叔取之。漸卦上六。疑陸字誤。胡翼之取之。自謂其學出於溢浦李處約廬山許堅。意豈果有師承。故程胡有所取焉。」

(4) 朱子　『本義』「胡氏程子皆云陸當作逵。謂雲路也。今以韻讀之良是。」

(5) 江氏　江永。出典未詳。

(6) 雲路　本條注(2)・(4)參照。

(7) 不臣天子不友諸侯　『禮記』儒行「儒有上不臣天子。下不事諸侯。」

(8) 踐其土食其毛　『左傳』昭公七年「天子經略。諸侯正封。

古之制也。封略之內。何非君土。食土之毛。誰非君臣。」

(9) 朱子發　『漢上易叢說』「夫上之所生者進也。所反亦進也。茲所以動而不窮歟。漸至九五極矣。進至上九亢矣。是以上反而之三。然後安處。」初句「夫上之所生者進也」の「生」は、疑うらくは「往（徃）」の譌。

(10) 楊廷秀　『誠齋易傳』卷十四「九三漸于陸。上九復漸于陸。何也。漸之進。至于九五之漸于陸。高之極也。不可踰矣。踰則僭。故九三下卦之極。上九上卦之極。其進也。皆至于高平之陸而止矣。然九三之漸于陸。躁于進也。雖平而高。上九之漸于陸。安于進也。雖高而平。何也。自干自盤。而至于陸。則其高爲驟。自陸自木自陵。而復至于陸。則其進爲退。上九以剛陽之德秉謙巽之極。名居一卦之上。實出一卦之外。其位彌高。其心彌下。其進彌徐。其退彌速。此其羽翼翔集。截然而不可亂。豈不足高出一世。而爲天下之儀表乎。故良平安劉之策。不妙于四老人。寇鄧重漢之功。不宏于一客星。然則學者欲學漸之一卦。將學其進乎。將學其不進乎。巽爲進退。又巽爲風。至上九。風之衰也。衝風之衰。不能起毛羽。故鴻復反于陸。艮巽皆上實而下散。鴻舒翼之象。」

(11) 姚刑部　姚鼐。出典未詳。

(12) 則吾……裕哉　『孟子』公孫丑下。

(13) 孔子　漸卦上九象辭「其羽可用爲儀。吉。不可亂也。」

君子以永終知敝

讀新臺桑中鶉奔之詩。而知衞有狄滅之禍。讀宛丘東門月出之詩。而察陳有徵舒之亂。書齊侯送姜氏於讙。而卜桓公之所以薨。書夫人姜氏入。書大夫宗婦覿用幣。而兆子般閔公之所以弑。昏姻之義。男女之節。君子可不慮其所終哉。

〈三十一〉　君子(1)以て終を永くして敝を知る

新臺(2)・桑中(3)・鶉奔(4)の詩を讀みて、衞に狄(5)滅ぼすの禍有るを知る。宛丘(6)・東門(7)・月出(8)の詩を讀みて、陳に徵舒(9)の亂有る

を察る。「齊[10]侯　姜氏を讙に送る」と書して、桓[11]公の薨ずる所以をトす。「夫人姜氏入る」と書し、「大[13]夫の宗婦覿ゆるに幣を用ふ」と書して、子般[14]・閔[15]公の弑せらるる所以を兆す。昏[16]嫺の義、男女の節、君子其の終る所を慮らざるべけんや。

(1) 君子以永終知敝　歸妹卦象傳。
(2) 新臺　邶風、新臺、序「新臺。刺衛宣公也。納伋之妻。作新臺于河上而要之。國人惡之而作是詩也。」
(3) 桑中　鄘風、桑中、序「桑中。刺奔也。衛之公室淫亂。男女相奔。至于世族在位。相竊妻妾。期於幽遠。政散民流。而不可止。」
(4) 鶉奔　鄘風、鶉之奔奔、序「鶉之奔奔。刺衛宣姜也。衛人以爲宣姜鶉鵲之不若也。」
(5) 狄滅之禍　『左傳』閔公二年。
(6) 宛丘　陳風、宛丘、序「宛丘。刺幽公也。淫荒昏亂。游蕩無度焉。」
(7) 東門　陳風、東門之枌、序「東門之枌。疾亂也。幽公淫荒。風化之所行。男女棄其舊業。亟會於道路。歌舞於市井爾。」東門之池、序「東門之池。刺時也。疾其君之淫昏。而思賢女以配君子也。」東門之楊、序「東門之楊。刺時也。昏姻失時。男女多違。親迎女猶有不至者也。」
(8) 月出　陳風、月出、序「月出。刺好色也。在位不好德。而說美色焉。」
(9) 徵舒之亂　『左傳』宣公九年・十年・十一年。
(10) 齊侯送姜氏於讙　『春秋』桓公三年。
(11) 桓公之所以薨　『春秋』及び『左傳』桓公十八年。
(12) 夫人姜氏入　『春秋』莊公二十四年。
(13) 大夫宗婦覿用幣　『春秋』莊公二十四年。
(14) 子般　『春秋』及び『左傳』莊公三十二年。
(15) 閔公　『春秋』及び『左傳』閔公二年。
(16) 昏嫺　原抄本は上に「皆」字有り。

鳥焚其巢

人主之德。莫大乎下人。楚莊王之圍鄭也。而曰。其君能下人。必能信用其民矣。故以禹之征苗。而伯益贊之。猶以滿招損。謙受益爲戒。班師者。謙也。用師者。滿也。上九處卦之上離之極。所謂有鳥高飛。亦傳於天者矣。居心以矜。而不聞諫爭之論。蓄必逮夫身者也。魯昭公之伐季孫意如也。請待於沂上以察罪。弗許。請囚於費。弗許。請以五乘亡。弗許。於是叔孫氏之甲興。而陽州次。乾侯唁矣。鸜鵒鸜鵒。往歌來哭。其此爻之占乎。

〔原注〕吳幼清曰。此爻變爲小過。有飛鳥之象。

〈三十二〉 鳥(1)其の巢を焚く

人主の德、人に下るより大なるは莫し。楚(2)の莊王の、鄭を圍むや、曰く、「其の君能く人に下る、必ず能く信もて其の民を用ひん。」故に禹(3)の、苗を征するを以てして、伯益之を贊くるに、猶ほ「滿は損を招き、謙は益を受く」を以て戒と爲す。師を班すは、謙なり、師を用ふるは、滿なり。上九は卦の上、離の極に處り、所謂「鳥(4)有り高く飛び、亦天に傳る」なり。心を居くに矜を以てして、諫爭の論を聞かず、蓄必ず夫の身に逮ぶ者なり。魯(7)の昭公の、季孫意如を伐つや、沂上に待ちて以て罪を察かにするを請ふに、許さず。費に囚はるるを請ふに、許さず。五乘を以て亡するを請ふに、許さず。是に於て叔孫氏の甲興りて、陽(8)州に次し、乾(9)公に唁ふ。「鸜(10)鵒鸜鵒、往くに歌ひ來るに哭す」とは、其れ此の爻の占か。

〔原注〕吳(11)幼清曰く、「此の爻變ずれば小過と爲る、飛(12)鳥の象有り。」

(1) 鳥焚其巢　旅卦上九爻辭。
(2) 楚莊……民矣　『左傳』宣公十二年。
(3) 禹之……爲戒　『尚書』大禹謨（偽古文）「三旬苗民逆命。益贊于禹曰。惟德動天。無遠弗屆。滿招損。謙受益。時乃天道。……禹拜昌言曰。俞。班師振旅。」
(4) 有鳥……于天　『毛詩』小雅、魚藻之什、菀柳「有鳥高飛。亦傅于天。彼人之心。于何其臻。曷予靖之。居以凶矜。」
(5) 居心以矜　前注參照。
(6) 蓄必逮夫身　『大學』「好人之所惡。惡人之所好。是謂拂人之性。蓄必逮夫身。」
(7) 魯昭……亡弗許　『左傳』昭公二十五年。
(8) 陽州次　『春秋』昭公二十五年「公孫于齊。次于陽州。」
(9) 乾侯唁　『春秋』昭公三十一年「晉侯使荀躒唁公于乾侯。」
(10) 鸜鵒……來哭　『左傳』昭公二十五年「有鸜鵒來巢。書所無也。師己曰。異哉。吾聞文武之世。童謠有之。曰。鸜之鵒之。公出辱之。鸜鵒之羽。公在外野。往饋之馬。鸜鵒跦跦。公在乾侯。徵褰與襦。鸜鵒來巢。遠哉遙遙。稠父喪勞。宋父以驕。鸜鵒鸜鵒。往歌來哭。今鸜鵒來巢。其將及乎。」
(11) 吳幼清　吳澄『易纂言』下經第二、旅、鳥焚其巢「象也。上變爲柔。成小過。有飛鳥之象。三四爲鳥身。而三之位與上應。鳥蓋指九三也。」
(12) 有飛鳥之象　小過卦彖傳「有飛鳥之象焉。飛鳥遺之音。不宜上宜下。大吉。上逆而下順也。」

巽在牀下

上九之巽在牀下。恭而無禮則勞也。初六之進退。愼而無禮則葸也。

〔汝成案〕二之所處。剛巽乎中正而志行者也。史以通人于神。巫以通神于人。紛若。卽重巽申命也。盤庚遷殷。反覆三誥。始惕以天之斷命。繼以乃祖乃父。乃斷棄汝。浮言胥動而不怒。傲上從康而不誅。所以吉无咎也。故曰得中。上九之巽在牀下。則失其齊斧矣。

〈三十三〉　巽して牀下に在り

上九[1]の「巽して牀下に在り」は、「恭[2]にして禮無ければ則ち勞す」なり。初六[3]の「進退」は、「愼[4]にして禮無ければ則ち蕙す」なり。

〔汝成案ずるに〕二[5]の處る所、「剛[6]中正に巽して志行はるる」者なり。史は以て人を神に通ぜしめ、巫は以て神を人に通ぜしむ。紛若は、卽ち「重巽[7]して命を申ぬる」なり。盤庚　殷に遷るに、反覆三たび誥す。始め惕るるに「天[8]の、命を斷つ」を以てし、繼ぐに「乃[9]が祖乃が父、乃ち汝を斷棄す」を以てす。浮言[10]　胥動かすも怒らず、上[11]に傲り康に從ふも誅せず、「吉にして咎无き」所以なり。故に「中を得」と曰ふ。上九の「巽して牀下に在る」は、則ち其の齊斧[12]を失ふなり。

(1) 上九　巽卦上九爻辭「巽在牀下。喪其資斧。貞凶。」

(2) 恭而……則勞　『論語』泰伯「恭而無禮則勞。愼而無禮則葸。勇而無禮則亂。直而無禮則絞。」

(3) 初六　巽卦六爻辭「進退。利武人之貞。」

(4) 愼而……則葸　注(2)參照。

(5) 二之所處　巽卦九二爻辭「巽在牀下。用史巫紛若。吉无咎。」象辭「紛若之吉。得中也。」

(6) 剛巽……志行　巽卦彖傳。

(7) 重巽以申命　巽卦彖傳。

(8) 天之斷命　『尙書』盤庚上「今不承于古。罔知天之斷命。」

(9) 乃祖……棄汝　盤庚中「汝有戕則在乃心。我先后綏乃祖乃父。乃祖乃父。乃斷弃汝。不救乃死。」

(10) 浮言胥動　盤庚上「汝曷弗告朕。而胥動以浮言。恐沈于衆。」

(11) 傲上從康　盤庚上「汝猷黜乃心。無傲從康。」蔡沈集傳「蓋傲上則不肯遷。從康則不能遷。」

(12) 齊斧　『周易』の諸本、「資斧」に作るが、『漢書』王莽

傳に、「此經所謂喪齊斧者也」とあり、敍傳に、「雖戒東南。　終用齊斧」とある。

翰音登于天

羽翰之音。雖登于天。而非實際。其如莊周齊物之言。騶衍怪迂之辯。其高過於大學而無實者乎。以視車服傳於弟子。弦歌徧於魯中。若鶴鳴而子和者。孰誕孰信。夫人而識之矣。永嘉之亡。太淸之亂。豈非談空空覈[元][元]者。有以致之哉。翰音登于天。中孚之反也。

〔汝成案〕豚魚之孚。可以及澤。翰音之登。難達于天。飛鳥遺音。不宜上。宜下也。溝澮皆盈。涸可立待矣。

〈三十四〉　翰音(1)　天に登る

羽翰の音、天に登ると雖も、而れども實際(2)に非ず。其れ莊周の齊物の言、騶衍の怪迂(3)の辯の如く、其の高きこと大學を過ぎて實無き者か。以て車服(4)　弟子に傳はり、弦歌　魯中に徧きこと、鶴鳴(5)きて子和するが若き者に視(くら)ぶれば、孰れか誕、孰れか信は、夫人(6)にして之を識る。永嘉の亡、太淸の亂は、豈空空(7)を談じ玄玄を覈する者、以て之を致す有るに非ざらんや。「翰音　天に登る」は、中孚の反なり。

〔汝成案ずるに〕豚(8)魚の孚は、以て澤を及ぼすべし。翰音の登るは、天に達し難し。飛鳥の遺音、宜しく上るべからず、宜しく下るべし。溝澮(9)皆盈つるも、涸るること立ちて待つべし。

(1) 翰音登于天　中孚卦上九爻辭。
(2) 實際　本來は佛語で、諸法實相の異名。
(3) 怪迂之辯　『史記』孟子荀卿列傳「騶衍……乃深觀陰陽消息。而作怪迂之變。終始大聖之篇。十餘萬言。」案ずるに、『史記』本文の「變」は、顧氏に倣って、讀んで「辯」と爲すのが勝るようである。
(4) 車服傳於弟子　『史記』孔子世家「太史公曰……適魯。觀仲尼廟堂車服禮器。諸生以時習禮其家。」
(5) 鶴鳴而子和　中孚卦九二爻辭「鶴鳴在陰。其子和之。」
(6) 夫人　人々、衆人の意。
(7) 談空空覈元元　孔德璋「北山移文」(『文選』卷四十三)「或歎幽人長往。或怨王孫不遊。談空空於釋部。覈玄玄於道流。」
(8) 豚魚之孚　中孚卦卦辭「豚魚吉。利涉大川。利貞。」
(9) 溝澮……立待　『孟子』離婁下「苟無本。七八月之間雨集。溝澮皆盈。其涸也可立而待也。」

山上有雷小過

山之高峻。雲雨時在其中間。而不能至其巔也。故詩曰。殷其靁。在南山之側。或高或下。在山之側。而不必至其巔。所以爲小過也。然則大壯言雷在天上。何也。曰。自地以上皆天也。

〈三十五〉　山上に雷有るは小過

山の高峻なる、雲雨時に其の中間に在りて、其の巔に至る能はざるなり。故に『詩』に曰く、「殷たる其の靁、南山の側に在り。」或は高く或は下く、山の側に在りて、必ずしも其の巔に至らず。小過と爲す所以なり。然らば則ち大

壯に、「雷[3]　天上に在り」と言ふは、何ぞや。曰く、地[4]より以上、皆天なればなり。

（1）山上有雷小過　小過卦象傳。
（2）詩　召南、殷其靁。
（3）雷在天上　大壯卦象傳。
（4）自地……天也　第十七條「天在山中」參照。

妣

爾雅。父曰考。母曰妣。愚攷。古人自祖母以上。通謂之妣。經文多以妣對祖而並言之。若詩之云似續妣祖。烝畀祖妣。易之云過其祖。遇其妣。是也。左傳昭十年。邑姜。晉之妣也。平公之去邑姜。蓋二十世矣。

〔原注〕儀禮士昏禮。勗帥以敬先妣之嗣。蓋繼世主祭之通辭。

過其祖。遇其妣。據文義。妣當在祖之上。不及其君。遇其臣。臣則在君之下也。昔人未論此義。周人以姜嫄爲妣。

〔原注〕周禮大司樂注。周人以后稷爲始祖。而姜嫄無所配。是以特立廟祭之。謂之閟宮。

周語謂之皇妣太姜。是以妣先乎祖。周禮大司樂。享先妣在享先祖之前。而斯干之詩曰。似續妣祖。箋曰。妣。先妣。姜嫄也。祖。先祖也。或乃謂變文以協韻。是不然矣。

〔原注〕朱子本義。以晉六二爲享先妣之吉占。

或曰。易爻何得及此。夫帝乙歸妹。箕子之明夷。王用亨于岐山。爻辭屢言之矣。

〈三十六〉　妣

『爾雅』[1]に、「父を考と曰ひ、母を妣と曰ふ。」愚攷[2]ふるに、古人　祖母より以上、通じて之を妣と謂ふ。經文多く妣を以て祖に對して之を並言す。『詩』の、「妣[3]祖に似續す」、「祖[4]妣に烝畀す」と云ひ、『易』[5]の、「其の祖を過ぎて、其の妣に遇ふ」と云ふが若き、是れなり。『左傳』昭十年に、「邑[6]姜は、晉の妣なり。」平公の、邑姜を去ること、蓋し二十世。

〔原注〕『儀禮』士昏禮の「勗め帥ひて以て先妣の嗣を敬め」は、蓋し繼世の主祭の通辭。

「其の祖を過ぎて、其の妣に遇ふ。」文義に據れば、妣は當に祖の上に在るべし。「其の君に及ばずして、其の臣に遇ふ。」臣は則ち君の下に在るなり。昔人未だ此の義を論ぜず。周人は姜嫄を以て妣と爲す。

〔原注〕『周[7]禮』大司樂の注に、「周人　后稷を以て始祖と爲す。而して姜嫄　配する所無し。是を以て特に廟を立て之を祭り、之を閟宮と謂ふ。」

周語[8]　之を皇妣太姜と謂ふ、是れ妣　祖より先なるを以てなり。『周禮』大司樂、「先妣を享する」は「先祖を享する」の前に在り。而して斯干の詩に曰く、「妣祖に似續す。」箋に曰く、「妣は、先妣、姜嫄なり。祖は、先祖なり。」或は[9]乃ち文を變へて以て韻を協すと謂ふ、是れ然らず。

〔原注〕朱子[10]『本義』、晉の六二を以て先妣を享するの吉占と爲す。

或は曰はん、『易』爻、何ぞ此に及ぶを得ん、と。夫れ「帝[11]乙　妹を歸がしむ」、「箕[12]子の明夷る」、「王[13]用て岐山に亨す」、爻辭屢〻之を言ふ。

(1) 爾雅　釋親。原據は「曰」を「爲」に作る。
(2) 愚攷　顧氏のこの說が正鵠を射たものであることは、甲骨文における殷王室の祖妣の稱謂に徵して明かである。
(3) 似續妣祖　小雅、鴻鴈之什、斯干。
(4) 烝畀祖妣　周頌、臣工之什、豐年。
(5) 易　小過卦六二爻辭「過其祖。遇其妣。不及其君。遇其臣。无咎。」
(6) 邑姜晉之妣也　この句の下の竹添井井の箋に、本條劈頭より「蓋二十世矣」までの全文が見える。但し、文中の「愚攷」を「但」に作り、且つ典據が示されていない。
(7) 周禮大司樂注　大司樂「以享先妣」下鄭注「先妣。姜嫄也。姜嫄履大人跡。感神靈而生后稷。是周之先母也。周立廟。自后稷爲始祖。姜嫄無所妃。是以特立廟祭之。謂之閟宮。閟神之。」釋文「妃音配。本亦作配。」
(8) 周語　『國語』周語下。
(9) 或乃……協韻　斯干、集傳「妣先於祖者。協下韻爾。或曰。謂姜嫄后稷也。」
(10) 朱子本義　晉卦六二爻辭「受茲介福于王母」本義「王母指六五。蓋享先妣之吉占。」
(11) 帝乙歸妹　泰卦六五爻辭・歸妹卦六五爻辭。
(12) 箕子明夷　明夷卦六五爻辭。
(13) 王用亨于岐山　升卦六四爻辭。

易本周易。故多以周之事言之。小畜卦辭。密雲不雨。自我西郊。本義。我者。文王自我也。

易は本、周易。故に多く周の事を以て之を言ふ。小畜卦辭に、「密雲、雨ふらず、我が西郊よりす。」[14]『本義』に、「我とは、文王自ら我とするなり。」

(14) 密雲……西郊　また小過卦六五爻辭に見ゆ。

東鄰

馭得其道。則天下皆爲之臣。馭失其道。則彊而擅命者。謂之鄰。臣哉鄰哉。鄰哉臣哉。

〈三十七〉 東鄰(1)

馭　其の道を得れば、則ち天下、皆之が臣と爲る。馭　其の道を失へば、則ち彊にして命を擅にする者、之を鄰と謂ふ。臣(2)なる哉鄰なる哉、鄰なる哉臣なる哉。

(1) 東鄰　既濟卦九五爻辭「東鄰殺牛。不如西鄰之禴祭。實受其福。」

(2) 臣哉鄰哉鄰哉臣哉　『尚書』皋陶謨（益稷）。

漢書郊祀志引此。師古注。東鄰謂商紂也。西鄰謂周文王也。

〔雷氏曰〕鄭康成坊記注云。東鄰謂紂國中也。西鄰謂文王國中也。班固通幽賦云。東瓜虐而殲仁兮。應劭注云。

東鄰謂紂。顏師古注云。丛古鄰字。是東漢時實有此說。今遺佚耳。

『漢書』郊祀志に此を引く。師古の注に、「東鄰は商の紂を謂ふなり、西鄰は周の文王を謂ふなり。」

〔雷氏曰く〕鄭康成の坊記[3]の注に云ふ、「東鄰は紂の國中を謂ふなり、西鄰は文王の國中を謂ふなり。」班固[4]の通[5]幽の賦に云ふ、「東丛　虐にして仁を殲す。」應劭の注に云ふ、「東鄰は紂を謂ふ。」顏師古の注に云ふ、「丛は古の鄰字。」是れ東漢の時、實に此の說有り。今、遺佚するのみ。

(3) 坊記　『禮記』坊記「故君苟無禮。雖美不食焉。易曰。東鄰殺牛。不如西鄰之禴祭。寔受其福。」

(4) 班固　『漢書』敍傳。

(5) 通幽　幽通の誤。

游魂爲變

精氣爲物。自無而之有也。游魂爲變。自有而之無也。夫子之荅宰我曰。骨肉斃於下。陰爲野土。其氣發揚於上。爲昭明焄蒿悽愴。

〔原注〕朱子曰。昭明。露光景也。鄭氏曰。焄謂香臭也。蒿氣蒸出貌。許氏曰。悽愴。使人慘慄感傷之意。魯菴徐氏曰。陽氣爲魂。附於體貌而人生焉。骨肉斃於下。其氣無所附麗。則發散飛揚於上。或爲朗然昭明之氣。或爲

温然焄蒿之氣。或爲肅然悽愴之氣。蓋陽氣輕清。故升而上浮。以從陽也。

所謂游魂爲變者。情狀具於是矣。延陵季子之葬其子也。曰。骨肉歸復於土。命也。若魂氣。則無不之也。無不之也。張子正蒙有云。太虛不能無氣。氣不能不聚而爲萬物。萬物不能不散而爲太虛。循是出入。是皆不得已而然也。然則聖人盡道其閒。兼體而不累者。存神其至矣。其精矣乎。

〈三十八〉 游魂[1] 變を爲す

「精氣[2] 物と爲る」は、無よりして有に之くなり。「游魂 變を爲す」は、有よりして無に之くなり。夫子[3]の、宰我に荅ふるに曰く、「骨肉 下に斃れ、陰して野土と爲る。其の氣 上に發揚し、昭明焄蒿悽愴と爲る。」

〔原注〕朱子[4]曰く、「昭明は、光景を露(あらは)すなり。」鄭[5]氏曰く、「焄は香臭を謂ふなり。蒿は氣の蒸出する貌。」許[6]氏曰く、「悽愴は、人をして慘慄感傷せしむるの意。」魯菴[7]徐氏曰く、「陽氣を魂と爲す。體貌に附して人生ず。骨肉 下に斃れ、其の氣 附麗する所無ければ、則ち發散して上に飛揚す。或は朗然たる昭明の氣と爲り、或は温然たる焄蒿の氣と爲り、或は肅然たる悽愴の氣と爲る。蓋し陽氣は輕清、故に升りて上に浮かび、以て陽に從ふなり。」

所謂「游魂 變を爲す」者、情狀 是に具はれり。延陵[8]の季子の、其の子を葬するや、曰く、「骨肉 土に歸復するは、命なり。魂氣の若きは、則ち之かざる無きなり、之かざる無きなり。」張子の『正蒙[9]』に云ふ有り、「太虛 氣無き能はず。氣 聚りて萬物と爲らざる能はず。萬物 散じて太虛と爲らざる能はず。是に循ひて出入するは、是れ皆、已むを得ずして然るなり。然らば則ち聖人 道を其の閒に盡くし、兼ね體して累せられざる者にして、神を存す

ること其れ至れり。」其れ精なるかな。

(1) 游魂爲變　繫辭傳上「精氣爲物。游魂爲變。是故知鬼神之情狀。」

(2) 精氣……無也　呂祖謙『周易繫辭精義』卷上所引『張載文集』「精氣者。自无而有。游魂者。自有而无。自无而有。神之情也。自有而无。鬼之情也。自无而有。故顯而爲物。自有而无。故隱而爲變。顯而爲物者。神之狀也。隱而爲變者。鬼之狀也。」

(3) 夫子之苔宰我　『禮記』祭義。

(4) 朱子　出典未詳。

(5) 鄭氏　祭義鄭注。

(6) 許氏　出典未詳。

(7) 魯菴徐氏　徐師曾。出典未詳。

(8) 延陵季子　『禮記』檀弓下。

(9) 正蒙　太和篇。

鬼者歸也。張子曰。氣之爲物。散入無形。適得吾體。此之謂歸。

鬼[10]とは、歸なり。張子[11]曰く、「氣の、物爲る、散じて無形に入り、適〻吾が體を得。」此を之れ歸と謂ふ。

(10) 鬼者歸也　『爾雅』釋訓「鬼之爲言。歸也。」『說文解字』九上「鬼。人所歸爲鬼。」

(11) 張子　『正蒙』太和篇。

陳無已

〔原注〕師道。

以游魂爲變爲輪迴之說。

〔原注〕理究。〔惠氏曰〕京房乾傳。精粹氣純。是爲游魂。陸績注。爲陰極剝盡。陽道不可盡滅。故返陽道道。不復本位。爲游魂。先樸菴易說曰。碩果不食。故有游魂。

呂仲木

〔原注〕柟。

辨之曰。長生而不化。則人多。世何以容。長死而不化。則鬼亦多矣。夫燈熄而然。非前燈也。雲霓而雨。非前雨也。死復有生。豈前生邪。

陳無已[12]

〔原注〕師道。

「游魂　變を爲す」を以て輪迴の說と爲す。

〔原注〕理、究まる。

〔惠氏曰く〕京房[14]、乾傳に、「精粹氣純は、是れ游魂と爲す。」陸績の注に、「陰極まるが爲に剝盡くるも、陽道盡[13]くは滅すべからず。故に陽道[15]に返り、本位に復せず、游魂と爲る。」先樸菴[16]の『易說』に曰く、「碩果[17]食はれず、故に游魂有り。」

呂仲木[18]

〔原注〕柟。

之を辨じて曰く、「長生して化せざれば、則ち人多し。世何を以てか容れん。長死して化せざれば、則ち鬼も亦多し。夫れ燈熄えて然ゆるは、前の燈に非ざるなり。雲霓ありて雨ふるは、前の雨に非ざるなり。死して復た生ずる有るは、豈前の生ならんや。」

(12) 陳無己　出典未詳。因みに、『正蒙』乾稱篇に、「惑者指游魂爲變爲輪迴」とある。

(13) 惠氏　惠棟『易漢學』卷四。

(14) 京房乾傳　『京氏易傳』卷上、晉卦。

(15) 陽道道　徐昂『京氏易傳箋』卷一「注文道字誤複。」

(16) 先樸菴　原據は「先曾王父樸菴先生」に作る。惠棟の曾祖父、有聲。

(17) 碩果不食　剝卦上九爻辭。

(18) 呂仲木　出典未詳。

邵氏

〔原注〕寶。

簡端錄曰。聚而有體。謂之物。散而無形。謂之變。唯物也。故散必於其所聚。唯變也。故聚不必於其所散。是故聚以氣聚。散以氣散。味於散者。

〔楊氏曰〕味疑作昧。

其說也佛。荒於聚者。其說也僊。

邵氏の

〔原注〕寶。

『簡端錄』[19]に曰く、「聚りて體有る、之を物と謂ふ。散じて形無き、之を變と謂ふ。唯だ物なり、故に散ずるは必ず其の聚る所に於てす。唯だ變なり、故に聚るは必ずしも其の散ずる所に於てせず。是の故に聚るは氣を以て聚り、散ずるは氣を以て散ず。散に味（昧）き者、

〔楊氏[20]曰く〕味[21]、疑ふらくは昧に作るならん。

其の說くや佛。聚に荒なる者、其の說くや僊。

(19) 簡端錄　卷三。

(20) 楊氏　楊名宁。出典未詳。

(21) 味　四庫全書本『簡端錄』は「昧」に作る。

盈天地之間者氣也。氣之盛者爲神。神者。天地之氣。而人之心也。故曰。視之而弗見。聽之而弗聞。體物而不可遺。使天下之人齊明盛服以承祭祀。洋洋乎如在其上。如在其左右。聖人所以知鬼神之情狀者如此。

天地の間に盈つる者は氣なり。氣の盛んなる者を神と爲す。神は、天地の氣にして、人の心なり。故に曰く、「之[22]を

視れども見えず、之を聽けども聞えず。物に體となりて遺るべからず。天下の人をして齊明盛服して、以て祭祀を承け、洋洋乎として其の上に在るが如く、其の左右に在るが如くならしむ。」聖人の、鬼神の情狀を知る所以の者、此の如し。

(22) 視之……左右　『中庸』。

維嶽降神。生甫及申。非有所託而生也。文王在上。於昭于天。非有所乘而去也。此鬼神之實。而誠之不可揜也。

「維[23]れ嶽　神を降し、甫及び申を生む。」託する所有りて生むに非ざるなり。「文[24]王　上に在り、於(ああ)　天に昭かなり。」乘ずる所有りて去るに非ざるなり。此れ鬼神の實にして、誠[25]の揜ふべからざるなり。

(23) 維嶽……及申　『毛詩』大雅、蕩之什、崧高。
(24) 文王……于天　『毛詩』大雅、文王之什、文王。
(25) 誠之不可揜　『中庸』。

通乎晝夜之道而知

日往月來。月往日來。一日之晝夜也。寒往暑來。暑往寒來。一歲之晝夜也。小往大來。大往小來。一世之晝夜也。子在川上曰。逝者如斯夫。不舍晝夜。通乎晝夜之道而知。則終日乾乾。與時偕行。而有以盡乎易之用矣。

〔楊氏曰〕此愼獨之義。

〈三十九〉 晝[1]夜の道を通じて知る

日[2]往き月來り、月往き日來るは、一日の晝夜なり。寒[3]往き暑來り、暑往き寒來るは、一歲の晝夜なり。小往き大來り、大往き小來るは、一世の晝夜なり。子[4]川上に在りて曰く、「逝く者は斯の如きか、晝夜を舍かず。」晝夜の道を通じて知れば、則ち終日[5]乾乾、時と偕に行ひて、以て易の用を盡くす有り。

〔楊氏[6]曰く〕此れ愼獨の義。

(1) 通乎……而知　繫辭傳上。
(2) 日往……日來　繫辭傳下「日往則月來。月往則日來。日月相推而明生焉。」
(3) 寒往……寒來　繫辭傳下「寒往則暑來。暑往則寒來。寒暑相推而歲成焉。」
(4) 子在川上曰　『論語』子罕。
(5) 終日……偕行　乾卦文言傳。
(6) 楊氏　楊名宁。出典未詳。

繼之者善也。成之者性也。

維天之命。於穆不已。繼之者善也。天下雷行。物與无妄。成之者性也。是故天有四時。春秋冬夏。風雨霜露。無非教也。地載神氣。神氣風霆。風霆流形。庶物露生。無非教也。

〈四十〉 之[1]を繼ぐ者は善なり、之を成す者は性なり。

「維[2]れ天の命、於穆として已まず」は、「之を繼ぐ者は善なり。」「天[3]の下に雷行き、物に无妄を與ふ」は、「之を成す者は性なり。」是の故に天[4]に四時有り、春秋冬夏、風雨霜露、教に非ざる無きなり。地 神氣を載す、神氣風霆、風霆 形を流し[5]き、庶物 露生す、教に非ざる無きなり。

(1) 繼之……性也　繫辭傳上。本條は、『中庸』冒頭に所謂性・道・教を念頭に置いた論と推測される。

(2) 維天……不已　『毛詩』周頌、清廟之什、維天之命。なお、『中庸』にこの詩句を引いて、「蓋曰天之所以爲天也」と言う。

(3) 天下……无妄　无妄卦象傳。

(4) 天有……露生無非教也　『禮記』孔子閒居。

天地絪縕。萬物化醇。善之爲言。猶醇也。曰。何以謂之善也。曰。誠者天之道也。豈非善乎。

「天[5]地 絪縕して、萬物 化醇す。」善の言爲る、猶ほ醇のごときなり。曰く、何を以て之を善と謂ふや。曰く、誠[6]は天の道なり。豈善に非ずや。

(5) 天地……化醇　繫辭傳下。

(6) 誠者天之道也　『中庸』。

形而下者謂之器

形而上者謂之道。形而下者謂之器。非器則道無所寓。說在乎孔子之學琴於師襄也。已習其數。然後可以得其志。已習其志。然後可以得其爲人。是雖孔子之天縱。未嘗不求之象數也。故其自言曰。下學而上達。

〈四十一〉　形而下なる者之を器と謂ふ

「形而上なる者之を道と謂ひ、形而下なる者之を器と謂ふ。」器に非ざれば則ち道寓する所無し。說は、孔子の、琴を師襄に學べるに在るなり。已に其の數を習ひ、然る後以て其の志を得べく、已に其の志を習ひ、然る後以て其の人と爲りを得べし。是れ孔子の天縱と雖も、未だ嘗て之を象數に求めずんばあらざるなり。故に其の自ら言へるに曰く、「下學して上達す。」

(1) 形而上……之器　繫辭傳上。

(2) 孔子之學琴於師襄　『史記』孔子世家。

(3) 天縱　『論語』子罕「大宰問於子貢曰。夫子聖者與。何其多能也。子貢曰。固天縱之將聖。又多能也。」

（4）下學而上達　『論語』憲問。

垂衣裳而天下治

垂衣裳而天下治。變質而之文也。自黃帝堯舜始也。故於此有通變宜民之論。

〈四十二〉　衣裳(1)を垂れて天下治まる

「衣裳を垂れて天下治まる」は、質を變じて文に之くなり、黃帝・堯舜より始まるなり。故に此に於て變を通じ民に宜ならしむるの論有り。

（1）垂衣裳而天下治　繫辭傳下「神農氏沒。黃帝堯舜氏作。通其變。使民不倦。神而化之。使民宜之。易窮則變。變則通。通則久。是以自天祐之。吉无不利。黃帝堯舜垂衣裳而天下治。蓋取諸乾坤。」

過此以往。未之或知也。

人之爲學。亦有病於憧憧往來者。故天下之不助苗長者寡矣。過此以往。未之或知也。居之安。則資之深。資之深。則取之左右。逢其原。

〈四十三〉 此[1]を過ぐる以往は、未だ之を知ること或らざるなり。

人の、學を爲す、亦「憧[2]憧として往來する」を病とする者有り、故に天[3]下の、苗を助けて長ぜしめざる者寡し。此を過ぐる以往は、未だ之を知ること或らざるなり。之[4]に居ること安ければ、則ち之に資ること深し。之に資ること深ければ、則ち之を左右に取り、其の原に逢ふ。

(1) 過此……知也　繫辭傳下。
(2) 憧憧往來　咸卦九四爻辭。
(3) 天下……寡矣　『孟子』公孫丑上。
(4) 居之……其原　『孟子』離婁下。

困德之辨也

內文明而外柔順。其文王之困而亨者乎。不怨天。不尤人。下學而上達。其孔子之困而亨者乎。故在陳之戹。絃歌之志。顏淵知之。而子路子貢之徒。未足以達此也。故曰。困德之辨也。

〈四十四〉 困[1]は徳の辨なり。

「内[2]、文明にして外、柔順」は、其れ文王の困[3]みて亨る者か。「天[4]を怨みず、人を尤めず、下學して上達す」は、其れ孔子の困みて亨る者か。故に陳[5]の戹に在りて、絃歌の志、顔淵之を知り、而して子路・子貢の徒、未だ以て此に達するに足らざるなり。故に曰く、「困は徳の辨なり。」

(1) 困徳之辨也　繫辭傳下。

(2) 内文明而外柔順　明夷卦彖傳「内文明而外柔順。以蒙大難。文王以之。」

(3) 困而亨　困卦彖傳「險以說。困而不失其所亨。其唯君子乎。」

(4) 不怨……上達　『論語』憲問。

(5) 在陳……此也　『史記』孔子世家「孔子遷于蔡三歲。吳伐陳。……於是乃相與發徒役圍孔子於野。不得行。絶糧。從者病。莫能興。孔子講誦弦歌不衰。子路愠見曰。君子亦有窮乎。孔子曰。君子固窮。小人窮斯濫矣。子貢色作。孔子曰。賜。爾以予爲多學而識之者與。曰。然。非與。孔子曰。非也。予一以貫之。……子貢出。顔回入見。孔子曰。回。詩云。匪兕匪虎。率彼曠野。吾道非邪。吾何爲於此。顔回曰。夫子之道至大。故天下莫能容。雖然。夫子推而行之。不容何病。不容然後見君子。夫道之不脩也。是吾醜也。夫道既已大脩而不用。是有國者之醜也。不容何病。不容然後見君子。孔子欣然而笑曰。有是哉顔氏之子。使爾多財。吾爲爾宰。」

凡易之情

愛惡相攻。遠近相取。情僞相感。人心之至變也。於何知之。以其辭知之。將叛者。其辭慙。中心疑者。其辭枝。吉人

之辭寡。躁人之辭多。誣善之人。其辭游。失其守者。其辭屈。聽其言也。觀其眸子。人焉廋哉。是以聖人設卦以盡情僞。夫誠於中。必形於外。君子之所以知人也。百物而爲之備。使民知神姦。先王之所以鑄鼎也。故曰。作易者。其有憂患乎。周身之防。御物之智。其全於是矣。

〈四十五〉 凡(1)そ易の情

「愛惡、相攻め」、「遠近、相取り」、「情僞、相感ずる」は、人心の至變なり。何に於てか之を知る。其の辭を以て之を知る。「將に叛かんとする者は、其の辭慙づ。中心疑ふ者は、其の辭枝(わか)る。吉人の辭は寡く、躁人の辭は多し。善を誣ふるの人は、其辭游す。其の守を失ふ者は、其の辭屈す。」其(2)の言を聽き、其の眸子を觀れば、人焉んぞ廋さんや。是を以て聖(3)人 卦を設けて以て情僞を盡くす。夫れ中(4)に誠なれば、必ず外に形はる、君子の、人を知る所以なり。百(5)物にして之が備を爲し、民をして神姦を知らしむ、先王の、鼎を鑄る所以なり。故に曰く、「易(6)を作る者は、其れ憂患有るか。」身(7)に周きの防、物を御するの智、其れ是に全し。

(1) 凡易之情　繫辭傳下「變動以利言。吉凶以情遷。是故愛惡相攻。而吉凶生。遠近相取。而悔吝生。情僞相感。而利害生。凡易之情。近而不相得則凶。或害之悔且吝。將叛者其辭慙。中心疑者其辭枝。吉人之辭寡。躁人之辭多。誣善之人其辭游。失其守者其辭屈。」

(2) 聽其……廋哉　『孟子』離婁上。

(3) 聖人……情僞　繫辭傳上「聖人立象以盡意。設卦以盡情僞。」

(4) 誠於……於外　『大學』「人之視己。如見其肺肝然。則何益矣。此謂誠於中。形於外。君子必愼其獨也。」

(5) 百物……神姦　『左傳』宣公三年「昔夏之方有德。遠方圖物。貢金九牧。鑄鼎象物。百物而爲之備。使民知神姦。」

（6）作易……患乎　繫辭傳下。

（7）周身之防　杜預、春秋左氏傳序「聖人包周身之防。」

易逆數也

數往者順。造化人事之迹。有常而可驗。順以攷之於前也。知來者逆。變化云爲之動。日新而無窮。逆以推之於後也。聖人神以知來。知以藏往。作爲易書。以前民用。所設者未然之占。所期者未至之事。是以謂之逆數。雖然。若不本於八卦已成之迹。亦安所觀其會通。而繫之爻象乎。是以天下之言性也。則故而已矣。

〈四十六〉　易(1)は逆數なり

「往を數ふる者は順。」造化人事の迹、常有りて驗すべし、順以て之を前に攷ふるなり。「來を知る者は逆。」變(2)化云爲の動、日に新たにして窮り無し、逆以て之を後に推すなり。聖(3)人　神は以て來を知り、知は以て往を藏し、易の書を作爲して、以て民用に前だつ。設くる所の者は未然の占、期する所の者は未だ至らざるの事。是を以て之を逆數と謂ふ。然りと雖も、若し八卦已に成れるの迹に本づかざれば、亦安んぞ其(4)の會通を觀て、之を爻象に繫くる所ならんや。是を以て天(5)下の、性を言ふや、則ち故のみ。

（1）易逆數也　說卦傳「數往者順。知來者逆。是故易逆數　也。」

（2）變化云爲　繫辭傳下「是故變化云爲。吉事有祥。象事知器。占事知來。」

（3）聖人……民用　繫辭傳上「聖人以此洗心。退藏於密。吉凶與民同患。神以知來。知以藏往。其孰能與於此哉。古之聰明叡知神武而不殺者夫。是以明於天之道。而察於民之故。是興神物以前民用。」

（4）觀其……爻象　繫辭傳上「聖人有以見天下之動。而觀其會通。以行其典禮。繫辭焉以斷其吉凶。是故謂之爻。」

（5）天下……已矣　『孟子』離婁下。朱注「性者人物所得以生之理也。故者其已然之跡。若所謂天下之故者也。」

劉汝佳曰。天地間一理也。聖人因其理而畫爲卦以象之。因其象而著爲變以占之。象者體也。象其已然者也。占者用也。占其未然者也。已然者爲往。往則有順之之義焉。未然者爲來。來則有逆之之義焉。如象天而畫爲乾。象地而畫爲坤。象雷風而畫爲震巽。象水火而畫爲坎離。象山澤而畫爲艮兌。此皆觀變於陰陽而立卦。發揮於剛柔而生爻者也。不謂之數往者順乎。如筮得乾而知乾元亨。利貞。筮得坤而知坤元亨。利牝馬之貞。筮得震而知震亨。震來虩虩。笑言啞啞。筮得巽而知巽小亨。利有攸往。利見大人。筮得坎而知習坎有孚。維心亨。行有尚。筮得離而知離利貞。亨。畜牝牛吉。筮得艮而知艮其背。不獲其身。行其庭。不見其人。筮得兌而知兌亨。利貞。此皆通神明之德。類萬物之情者也。不謂之知來者逆乎。夫其順數已往。正所以逆推將來也。孔子曰。殷因於夏禮。所損益可知也。周因於殷禮。所損益可知也。數往者順也。其或繼周者。雖百世可知也。知來者逆也。故曰。易逆數也。若如邵子之說。則是羲文之易已判而爲二。而又以震離兌乾爲數已生之卦。巽坎艮坤爲推未生之卦。殆不免強孔子之書以就己之說矣。

〔錢氏曰〕先生不信康節先天之學。其識高於元明諸儒遠矣。

劉汝佳[6]曰く、天地[7]の間、一理なり。聖人　其の理に因りて畫いて卦を爲して以て之を象り、其の象に因りて著して變を爲して以て之を占ふ。象は體なり、其の已然を象る者なり。占は用なり、其の未然を占ふ者なり。已然なる者を往と爲す、往は則ち之に順ふの義有り。未然なる者を來と爲す、來は則ち之を逆ふの義有り。天を象りて畫いて乾を爲し、地を象りて畫いて坤を爲し、雷風を象りて畫いて震巽を爲し、水火を象りて畫いて坎離を爲し、山澤を象りて畫いて艮兌を爲すが如き、此れ皆、變[8]を陰陽に觀て卦を立て、剛柔を發揮して爻を生ずる者なり。之[9]を「往を數ふる者は順」と謂はざらんや。筮[10]して乾を得て「乾は元いに亨る、貞に利あり」を知り、筮して坤を得て「坤は元いに亨る、牝馬の貞に利あり」を知り、筮して震を得て「震は亨る、震の來るとき虩虩たり、笑言　啞啞たり」を知り、筮して巽を得て「巽は小し亨る、往く攸有るに利あり、大人を見るに利あり」を知り、筮して坎を得て「習坎は孚有り、維れ心亨る、行くに尙ふること有り」を知り、筮して離を得て「離は貞に利あり、亨る、牝牛を畜へば吉」を知り、筮して艮を得て「其の背に艮り、其の身を獲ず、其の庭に行きて、其の人を見ず」を知り、筮して兌を得て「兌は亨る、貞に利あり」を知るが如き、此れ皆、神明[11]の德に通じ、萬物の情に類する者なり。之[9]を「來を知る者は逆」と謂はざらんや。夫れ其の、順もて已往を數ふるは、正に逆もて將來を推す所以なり。孔子[13]曰く、「殷は夏禮に因る、損[14]益する所知るべきなり。周は殷禮に因る、損益する所知るべきなり。」「往[15]を數ふる者は順」なり。「其れ周を繼ぐ者或らば、百世と雖も知るべきなり。」「來[16]を知る者は逆」なり。故に曰く、「易は逆數なり。」邵子の說の若如きは、則ち是れ羲[17]文の易、已に判ちて二と爲す。而るに又震離兌乾を以て已生を數ふるの卦と爲し、巽[18]坎艮坤を未生を推すの卦と爲す。殆[19]ど孔子の書を強ひて以て己の說に就かしむるを免れず。

〔錢[20]氏曰く〕先生　康節の先天の學を信ぜず。其の識　元明諸儒より高きこと遠し。

(6) 劉汝佳　『劉婺州集』(內閣文庫藏) 卷二十四、雜著、論經二則、邵易誤解。引用は、本條の末尾まで。

(7) 天地間一理也　原據は「嘗思天地間只是一個道」に作る。

(8) 觀變……生爻　說卦傳。なお、『劉婺州集』は「於」を「于」に作る。以下これに倣う。

(9) 不謂之　原據は「非所謂」に作る。

(10) 筮　原據は「著」に作る。以下これに倣う。

(11) 通神……之情　繫辭傳下「於是始作八卦。以通神明之德。以類萬物之情。」

(12) 夫　原據では、この下に「數往知來皆作易本旨而何以獨曰易逆數也予以爲」の二十一字有り。

(13) 孔子　『論語』爲政。

(14) 所損益可知也　『劉婺州集』では、この句を缺く。

(15) 數往者順也　原據は、この句無し。

(16) 知來者逆也　原據では、この句の替りに「然則說卦之旨其卽論語之旨乎蓋就一事中分爲兩事而言又就兩事中合爲一事而言」の三十五字有り。

(17) 羲文……二而　原據は「羲易文易已判然兩物矣且」に作る。

(18) 巽坎……之卦　原據では、この下に「某實不解也夫生則俱生有則俱有何爲生半截而又推半截乎故乾一兌二離三震四巽五坎六艮七坤八雖是卦生次序不爲無理然執以解定位通氣相薄不相射之文爲先天卦位」の七十二字有り。

(19) 殆不……說矣　原據は「則未免強分孔子之說以俯就己之說也」に作る。また、その後に「當時二程夫子不貴康節之術或亦有於此乎」と述べて論を結ぶ。

(20) 錢氏　錢大昕。出典未詳。

說卦雜卦互文

雷以動之。風以散之。雨以潤之。日以晅之。艮以止之。兌以說之。乾以君之。坤以藏之。上四舉象。下四舉卦。各以

其切於用者言之也。終萬物。始萬物者。莫盛乎艮。崔憬曰。艮不言山。獨舉卦名者。以動撓燥潤。功是風雷水火。至於終始萬物。於山義則不然。故舍象而言卦。各取便而論也。得之矣。

〔汝成案〕李鼎祚周易集解。作故言卦而餘皆稱物。故言卦句。今云故舍象而言卦。義雖無異。文則未賅。

〈四十七〉 說卦・雜卦の互文

「雷(1)以て之を動かし、風以て之を散じ、雨以て之を潤し、日以て之を晅(かは)かし、艮以て之を止め、兌以て之を說(よろこ)ばし、乾以て之を君とし、坤以て之を藏す。」上の四は象を擧げ、下の四は卦を擧ぐ。各〻其の、用に切なる者を以て之を言ふなり。「萬物(2)を終へ、萬物を始むる者、艮より盛なるは莫し。」崔憬(3)曰く、「艮　山を言はず、獨り卦名を擧ぐる者は、動撓(4)燥潤、功は是れ風雷水火、萬物を終始するに至つては、山の義に於て則ち然らざるを以て、故に象を舍てて卦を言ふ。各〻便を取りて論ずるなり。」之を得たり。

〔汝成案ずるに〕李鼎祚『周易集解』、「故言卦而餘皆稱物」に作る。「故言卦」の句、今、「故舍象而言卦」と云ふ。義　異なる無しと雖も、文は則ち未だ賅(た)らず。

(1) 雷以……藏之　說卦傳。
(2) 終萬……乎艮　說卦傳。
(3) 崔憬　李鼎祚『周易集解』卷十七所引。なお、後掲の黃汝成の案語を參照。
(4) 動撓……水火　說卦傳「動萬物者。莫疾乎雷。撓萬物者。莫疾乎風。燥萬物者。莫熯乎火。說萬物者。莫說乎澤。潤萬物者。莫潤乎水。」

古人之文。有廣譬而求之者。有擧隅而反之者。今夫山。一卷石之多。今夫水。一勺之多。天地之外。復言山水者。意有所不盡也。坤也者地也。不言西南之卦。兌正秋也。不言西方之卦。擧六方之卦而見之也。意盡於言矣。虞仲翔以爲坤道廣布。不主一方。及兌象不見西者。妄也。

古人の文、廣く譬へて之を求むる者有り、隅(5)を擧げて之を反す者有り。「今(6)夫れ山は、一卷石の多きなり。」「今夫れ水は、一勺の多きなり。」天地の外、復た山水を言ふ者は、意 盡くさざる所有ればなり。「坤(7)なる者は地なり。」西南の卦なるを言はず。「兌(8)は正秋なり。」西方の卦なるを言はず。六方の卦を擧げて之を見すなり。意(9) 言に盡く。虞(10)仲翔 以て坤道は廣く布し、一方を主とせず、及び兌の象は西を見さずと爲すは、妄なり。

(5) 擧隅而反之　『論語』述而「擧一隅。不以三隅反。則不復也。」

(6) 今夫山……勺之多　『中庸』「今夫天。斯昭昭之多。及其窮也。日月星辰繫焉。萬物覆焉。今夫地。一撮土之多。及其廣厚。載華嶽而不重。振河海而不洩。萬物載焉。今夫山。一卷石之多。及其廣大。艸木生之。禽獸居之。寶藏興焉。今夫水。一勺之多。及其不測。黿鼉蛟龍魚鼈生焉。貨財殖焉。」

(7) 坤也者地也　說卦傳。

(8) 兌正秋也　說卦傳。

(9) 意盡於言矣　繫辭傳上「書不盡言。言不盡意。」

(10) 虞仲翔　李鼎祚『周易集解』卷十七「坤陰無陽。故道廣布不主一方。」「兌三失位不正。故言正秋。兌象不見西。故不言西方之卦。與坤同義。」

豐多故。親寡旅也。先言親寡。後言旅。以協韻也。猶楚辭之吉日兮辰良也。虞仲翔以爲別有義。非也。

「豐[11]は多故、親寡きは旅なり。」先に「親寡」と言ひ、後に「旅」と言ふは、協韻を以てなり。猶ほ『楚辭[12]』の「吉日、辰良」のごときなり。虞仲翔[13]以て別に義有りと爲す、非なり。

(11) 豐多故親寡旅也　雜卦傳。なお、原據は「故」下に「也」字有り。

(12) 楚辭　九歌「吉日兮辰良。穆將愉兮上皇。」良・皇はともに古韻陽部。「辰良」は押韻のための倒言。

(13) 虞仲翔　李鼎祚『周易集解』卷十七「豐大。故多。旅无容。故親寡。六十四象。皆先言卦及道其指。至旅體離四。焚棄之行。又在旅家。故獨先言親寡。而後言旅。」

兌爲口舌

兌爲口舌。其於人也。但可以爲巫爲妾而已。以言說人。豈非妾婦之道乎。

〈四十八〉　兌[1]を口舌と爲す

「兌を口舌と爲す。」其の、人に於けるや、但以て巫と爲し、妾と爲すべきのみ。言を以て人を說(よろこ)ばしむるは、豈妾婦[2]

の道に非ずや。

(1) 兌爲口舌　說卦傳「兌爲澤。爲少女。爲巫。爲口舌。爲毀折。爲附決。其於地也爲剛鹵。爲妾。爲羊。」

(2) 妾婦之道　『孟子』滕文公下「以順爲正者。妾婦之道也。」

凡人於交友之閒。口惠而實不至。則其出而事君也。必至於靜言庸違。故舜之禦臣也。

〔楊氏曰〕禦當作於。

敷奏以言。明試以功。而孔子之於門人。亦聽其言而觀其行。

凡そ人の、交友の閒に於ける、口惠にして實至らざれば、則ち其の出でて君に事ふるや、必ず靜言庸違に至る。故に舜の、臣に禦（於）けるや、

〔楊氏曰く〕禦は當に於に作るべし。

敷奏　言を以てし、明試　功を以てす。而して孔子の、門人に於ける、亦其の言を聽きて其の行を觀る。

(3) 口惠而實不至　『禮記』表記「口惠而實不至。怨菑及其身。」

(4) 靜言庸違　『尙書』堯典。蔡沈『集傳』「靜言庸違者。靜則能言。用則違背也。」

(5) 楊氏　楊名宁。出典未詳。

(6) 敷奏……以功　『尙書』舜典。蔡沈『集傳』「程子曰。敷

奏以言者。使各陳其爲治之說。言之善者。則從明考其功。」

（7）聽其言而觀其行　『論語』公冶長。

唐書言韋貫之自布衣爲相。與人交。終歲無欵曲。未嘗僞辭以悅人。其賢於今之人遠矣。

『唐書』(8)に言ふ、「韋貫之　布衣より相と爲り、人と交はるに、終歲、欵曲無く、未だ嘗て僞辭以て人を悅ばしめず。」其の、今の人に賢ること遠し。

（8）唐書　『舊唐書』韋貫之傳「貫之自布衣至貴位。居室無改易。歷重位二十年。苞苴寶玉。不敢到門。性沈厚寡言。與人交。終歲無款曲。未嘗僞詞以悅人。身歿之後。家無羨財。」

序卦雜卦

序卦雜卦。皆旁通之說。先儒疑以爲非夫子之言。然否之大往小來。承泰之小往大來也。解之利西南。承蹇之利西南。不利東北也。是文王已有相受之義也。益之六二。卽損之六五也。其辭皆曰。十朋之龜。姤之九三。卽夬之九四也。其辭皆曰。臀无膚。未濟之九四。卽旣濟之九三也。其辭皆曰。伐鬼方。是周公已有反對之義也。必謂六十四卦皆然。則

非易書之本意。或者夫子嘗言之。而門人廣之。如春秋哀十四年西狩獲麟以後續經之作耳。

〈四十九〉 序卦・雜卦

序卦・雜卦、皆、旁通の說なり。先儒(1)疑ひて以て夫子の言に非ずと爲す。然れども否の「大往き小來る」は、泰の「小往き大來る」を承くるなり。解の「西南に利あり」は、蹇の「西南に利あり、東北に利あらず」を承くるなり。是れ文王已に相受くるの義有るなり。益の六二は、卽ち損の六五なり。其の辭に皆曰く、「十朋の龜」。姤の九三は、卽ち夬の九四なり。其の辭に皆曰く、「臀に膚无し」。未濟の九四は、卽ち旣濟の九三なり。其の辭に皆曰く、「鬼方を伐つ」。是れ周公已に反對の義有るなり。必ず六十四卦皆、然りと謂はば、則ち『易』の書の本意に非ず。或は夫子嘗て之を言ひて、門人之を廣む、『春秋』哀十四年の「西のかた狩して麟を獲」以後の續經の作の如きのみ。

(1) 先儒……之言　程迥『周易古占法』卷下「先儒曰。序卦非易之蘊。朱待制新仲嘗謂迥曰。序卦非聖人書。唐僧一行易纂引孟喜序卦曰。陰陽養萬物。必訟而成之。君臣養萬民。亦訟而成之。然則今序卦亦出於經師。可知也。而其閒藏反對卦變之義。其雜卦之末。又出一卦特立之義。」

晉晝也。明夷誅也。

蘇氏曰。晝日三接。故曰晝。得其大首。故曰誅。晉當文明之世。羣后四朝。而車服以庸。揖讓之事也。明夷逢昏亂之

時。取彼凶殘。而殺伐用張。征誅之事也。一言疊。一言誅。取其音協爾。

〔原注〕疊古音注。易林及張衡西京賦並同。　虞仲翔曰。誅。傷也。本義。用之與疊義相對不切。

〈五十〉　晉(1)は疊なり、明夷は誅なり。

蘇(2)氏曰く、「疊(3)日三たび接す、故に疊と曰ふ。其(4)の大首を得、故に誅と曰ふ。」晉は文明の世に當たり、羣(5)后　四朝して、車服　庸を以てす、揖讓の事なり。明夷は昏亂の時に逢ひ、彼(6)の凶殘を取りて、殺伐用て張る、征誅の事なり。一は疊と言ひ、一は誅と言ふは、其の音の協するを取るのみ。

〔原注〕疊　古音注。『易林』及び張衡の西京の賦並びに同じ。

虞仲翔(7)曰く、「誅は傷なり。」『本義』　之を用ひ疊の義と相對せしむるは切ならず。

(1) 蘇氏　『東坡先生易傳』卷九。
(2) 晉晝也明夷誅也　雜卦傳。
(3) 晝日三接　晉卦卦辭。
(4) 得其大首　明夷卦九三爻辭。
(5) 羣后……以庸　『尚書』舜典「五載一巡守。羣后四朝。敷奏以言。明試以功。車服以庸。」
(6) 取彼……用張　『尚書』泰誓中（僞古文）「我武惟揚。侵于之疆。取彼凶殘。我伐用張。」
(7) 虞仲翔　李鼎祚『周易集解』卷十七所引。

孔子論易

孔子論易。見於論語者。二章而已。曰。加我數年。五十以學易。可以無大過矣。曰。南人有言。曰。人而無恆。不可以作巫醫。善夫。不恆其德。或承之羞。子曰。不占而已矣。是則聖人之所以學易者。不過庸言庸行之閒。而不在乎圖書象數也。今之穿鑿圖象以自爲能者。畔也。

〈五十一〉 孔子 易を論ず

孔子 易を論じ、『論語』に見ゆる者は、二章のみ。曰く、「我[1]に數年を加し、五十以て易を學ばば、以て大過無かるべし。」曰く、「南人[2]に言有り、曰く、人にして恆無くんば、以て巫醫と作るべからず、と。善きかな。其の德[3]を恆にせざれば、或は之に羞を承む。子曰く、占はざるのみ。」是れ則ち聖人の、易を學ぶ所以の者、庸言庸行[4]の閒に過ぎずして、圖書象數に在らざるなり。今の、圖象を穿鑿して以て自ら能くすと爲す者は、畔くなり。

(1) 加我……過矣　述而。
(2) 南人……已矣　子路。
(3) 不恆……之羞　恆卦九三爻辭。
(4) 庸言庸行　乾卦文言傳「庸言之信。庸行之謹。」

記者於夫子學易之言。而卽繼之曰。子所雅言。詩書執禮。皆雅言也。是知夫子平日不言易。而其言詩書執禮者。皆言易也。人苟循乎詩書執禮之常而不越焉。則自天祐之。吉无不利矣。故其作繫辭傳。於悔吝无咎之旨。特諄諄焉。而大

象所言。凡其體之於身。施之於政者。無非用易之事。然辭本乎象。故曰。君子居則觀其象而玩其辭。觀之者淺。玩之者深矣。其所以與民同患者。必於辭焉著之。故曰。聖人之情見乎辭。若天一地二。易有太極二章。皆言數之所起。亦贊易之所不可遺。而未嘗專以象數教人爲學也。是故出入以度。无有師保。如臨父母。文王周公孔子之易也。希夷之圖。康節之書。道家之易也。自二子之學興。而空疏之人。迂怪之士。擧竄迹於其中以爲易。而其易爲方術之書。於聖人寡過反身之學。去之遠矣。

〔楊氏曰〕此論與朱子異。

記す者　夫子の學易の言に於て、卽ち之を繼ぎて曰く、「子[5]の雅言する所、『詩』『書』執禮、皆、雅言なり。」是れ夫子　平日、易を言はざるを知る。而れども其の『詩』『書』執禮を言ふは、皆、易を言ふなり。人苟くも『詩』『書』執禮の常に循ひて越えざれば、則ち天[6]より之を祐け、吉にして利しからざる无し。故に其の繫辭傳を作る、悔吝[7]・无咎の旨に於て、特に諄諄たり。而して大象に言ふ所、凡て其れ之を身に體し、之を政に施す者にして、易を用ふるの事に非ざる無し。然れども辭は象に本づく。故に曰く、「君子[8]居りては則ち其の象を觀て其の辭を玩ぶ。」之を觀る者は淺く、之を玩ぶ者は深し。其の、民[9]と患を同じくする所以の者、必ず辭に於て之を著す。故に曰く、「聖人[10]の情辭に見はる。」「天[11]一地二」、「易[12]に太極有り」の二章の若きは、皆、數の起こる所を言ふも、亦易の遺るべからざるを贊して、未だ嘗て專ら象數を以て人に教ふるを學と爲さざるなり。是の故に出入[13]　度を以てし、師保有る无きも、父母に臨むが如きは、文王・周公・孔子の易なり。希夷の圖、康節の書は、道家の易なり。二子の學興りてより、空疏の人、迂怪の士、擧げて迹を其の中に竄(かく)して以て易と爲す。而して其の易は方術の書爲り。聖人の寡過[14]反身[15]の學に於

て、之を去ること遠し。

〔楊氏[16]曰く〕此の論　朱子と異なれり。

(5) 子所……言也　述而。朱注「謝氏曰。此因學易之語而類記之。」

(6) 自天……不利　大有卦上九爻辭。

(7) 悔吝无咎之旨　繫辭傳上「吉凶者。言乎其失得也。悔吝者。言乎其小疵也。无咎者。善補過也。……辨吉凶者存乎辭。憂悔吝者存乎介。震无咎者存乎悔。」

(8) 君子……其辭　繫辭傳上。

(9) 與民同患　繫辭傳上「聖人以此洗心。退藏於密。吉凶與民同患。」

(10) 聖人之情見乎辭　繫辭傳下。

(11) 天一地二　繫辭傳上。

(12) 易有太極　繫辭傳上。

(13) 出入……父母　繫辭傳下「其出入以度。外內使知懼。又明於憂患與故。无有師保。如臨父母。」

(14) 寡過　『論語』憲問「夫子欲寡其過。而未能也。」

(15) 反身　『孟子』離婁上「悅親有道。反身不誠。不悅於親矣。」『孟子』盡心上「萬物皆備於我矣。反身而誠。樂莫大焉。強恕而行。求仁莫近焉。」

(16) 楊氏　楊名宁。出典未詳。

詩三百。一言以蔽之。曰思無邪。易六十四卦。三百八十四爻。一言以蔽之。曰。不恆其德。或承之羞。夫子所以思得見夫有恆也。有恆。然後可以無大過。

詩[17]三百、一言以て之を蔽へば、曰く、「思　邪無し。」易六十四卦、三百八十四爻、一言以て之を蔽へば、曰く、「其

の徳を恒にせざれば、或は之に羞を承む。」夫子の、夫(か)の恒有るを見るを得るを思ふ所以なり。恒有り、然る後、以て大過無かるべし。

(17) 詩三……無邪　『論語』爲政。

七八九六

易有七八九六。而爻但繫九六者。舉隅之義也。故發其例於乾坤二卦。曰用九用六。用其變也。亦有用其不變者。春秋傳。穆姜遇艮之八。晉語。董因得泰之八。是也。

〔原注〕杜元凱注。謂雜用連山歸藏。二易皆以七八爲占。故言遇艮之八者。非。　晉語。公子筮。得貞屯悔豫皆八。本卦爲貞。之卦爲悔。沙隨程氏曰。初與四五。凡三爻變。其不變者。二三上。在屯爲八。在豫亦八。今卽以艮言之。二爻獨變。則名之六。餘爻皆變。而二爻獨不變。則名之八。是知乾坤亦有用七用八時也。乾爻皆變而初獨不變。曰初七潛龍勿用。可也。坤爻皆變而初獨不變。曰初八履霜堅冰至。可也。占變者其常也。占不變者其反也。故聖人繫之九六。歐陽永叔曰。易道占其變。故以其所占者名爻。不謂六爻皆九六也。得之矣。

〔錢氏曰〕春秋之世。三易尙存。其以周易占。一爻變。則以變爻辭占。如觀之否。歸妹之睽。明夷之謙之類。是也。數爻變。則以彖辭占。如艮之八。屯貞悔豫皆八。是也。六爻皆不變。亦以彖辭占。泰之八。是也。以爻辭占

稱九六。以彖辭占稱八。九六八之名。惟周易有之。若雜以它占則否。千乘三去。射其元王。不云蠱之八。復之八者。非周易繇詞也。〔又曰〕惠氏棟嘗言之。蓍圓而神。七也。卦方以知。八也。六爻易以貢。九六也。七七四十九蓍之數。八八六十四卦之數。九六變成三百八十四。爻之數。神以知來。知以藏往。知來爲卦之未成者。藏往爲卦之已成者。故不曰七而曰八。春秋內外傳。從無筮得某卦之七者。以七者筮之數未成卦也。

〈五十二〉 七八九六

易に七八九六有り。而して爻　但九六を繫くる者は、隅[1]を擧ぐるの義なり。故に其の例を乾坤二卦に發き、用九・用六と曰ふ。其の變を用ふるなり。亦其の不變を用ふる者有り。『春秋傳[2]』に、穆姜　艮の、八に之くに遇ふ、晉語[3]に、董因　泰の、八に之くを得、是れなり。

〔原注〕杜元凱の注に、「連山・歸藏を雜用す。二易　皆七八を以て占を爲す。故に艮の、八に之くに遇ふと言ふ」と謂ふ者は、非なり。

晉語[4]に、公子筮して、貞屯悔豫、皆八を得るなり。本卦を貞と爲し、之卦を悔と爲す。沙隨[5]の程氏曰く、「初と四・五と、凡そ三爻の變。其の變ぜざる者は、二・三・上。屯に在りて八と爲し、豫に在りても亦八なり。」今卽ち艮を以て之を言はば、二爻獨り變ずれば、則ち之を六と名づく。餘爻皆變じて、二爻獨り變ぜざれば、則ち之を八と名づく。是れ乾坤も亦用七・用八の時有るを知るなり。乾の爻　皆變じて初獨り變ぜざれば、「初七、潛龍用ふる勿れ」と曰ひて、可なり。坤の爻　皆變じて初獨り變ぜざれば、「初八、霜を履んで堅冰至る」と曰ひて、可なり。變を占ふ者は其の常なり、不變を占ふ者は其の反なり。故に聖人　之を九六に繫く。歐陽[6]永叔曰く、「易の道は

其の變を占ふ。故に其の占ふ所の者を以て爻に名づく。六爻　皆九六なるを謂はざるなり。」之を得たり。

〔錢氏曰く〕[7]春秋の世、三易尚ほ存す。其の、周易を以て占ふは、一爻の變なれば、變爻の辭を以て占ふ。觀[8]の、否に之き、歸妹の、睽に之き、明夷[9]の、謙に之くの類の如き、是れなり。數爻の變なれば、則ち彖辭を以て占ふ。艮の、八に之き、屯[10]貞悔豫、皆八の如き、是れなり。六爻　皆不變なれば、亦彖辭を以て占ふ。泰の、八に之く、是れなり。爻辭を以て占へば九六と稱し、彖辭を以て占へば八と稱す。九六八の名、惟だ周易にのみ之有り。若し雜ふるに它占を以てすれば則ち否[しから]ず。「千[12]乘三去す」、「其[13]の元王を射る」、蠱の、八に之き、復の、八に之くと云はざる者は、周易の繇詞に非ざればなり。

〔又曰く〕惠氏[14]棟嘗て之を言ふ。蓍[15]は圓にして神、七なり。卦は方にして以て知る、八なり。六爻は易へて以て貢[つ]ぐ、九六なり。七七四十九は蓍の數。八八六十四は卦の數。九六變じて三百八十四を成すは、爻の數。神[16]は以て來を知り、知は以て往を藏す。來を知るは卦の未だ成らざる者と爲し、往を藏するは卦の已に成れる者と爲す。故に七と曰はずして八と曰ふ。『春秋』內外傳、從ひて筮して某卦の、七に之く者を得る無きは、七は筮の數にして未だ卦を成さざるを以てなり。

(1) 擧隅　第四十七條注(5)參照。
(2) 春秋傳　『左傳』襄公九年。なお、第二條を參照。
(3) 晉語　『國語』晉語四。
(4) 晉語　『國語』晉語四。韋昭注「內曰貞。外曰悔。震下坎上屯。坤下震上豫。得此兩卦。震在屯爲貞。在豫爲悔。八謂震兩陰爻。在貞在悔皆不動。故曰皆八。謂爻無爲也。」
(5) 沙隨程氏　程迥『周易古占法』。
(6) 歐陽永叔　『易童子問』卷一(『歐陽文忠公集』卷七十六)「童子問曰。乾曰用九。坤曰用六。何謂也。曰。釋所以不用七八也。乾爻七。九則變。坤爻八。六則變。易用變以爲占。

故以名其爻也。」

(7) 錢氏　錢大昕。出典未詳。

(8) 觀之否　『左傳』莊公二十二年。

(9) 歸妹之睽　『左傳』僖公十五年。

(10) 明夷之謙　『左傳』昭公五年。

(11) 屯貞　貞屯の誤倒。

(12) 千乘三去　第一條參照。

(13) 射其元王　第一條參照。

(14) 惠氏棟　出典未詳。

(15) 著圓……以貢　繫辭傳上「是故蓍之德圓而神。卦之德方以知。六爻之義易以貢。」

(16) 神以……藏往　繫辭傳上。なお、第四十六條を參照。

趙汝楳易輯聞曰。揲蓍策數。凡得二十八。雖爲乾。亦稱七。凡得三十二。雖爲坤。亦稱八。

趙[17]汝楳の『易輯聞』に曰く、「揲蓍の策數、凡そ二十八を得れば、乾爲りと雖も、亦[18]七を稱す。凡そ三十二を得れば、坤爲りと雖も、亦[19]八を稱す。」

(17) 趙汝楳易輯聞　引用文は、『周易輯聞』ではなく、趙汝楳撰の『筮宗』に認められる。

(18) 亦稱七　原據では、この下に「若爲三男則未必皆七」の句有り。

(19) 亦稱八　原據では、この下に「若爲三女則未必皆八」の句有り。

楊彥齡筆錄曰。楊損之蜀人。博學善稱說。余嘗疑易用九六。而無七八。損之云。卦畫七八。爻稱九六。

楊彦齡の『筆錄』[20]に曰く、「楊損之　蜀の人、博學にして善く稱說す。余嘗て易に九六を用ひて、七八無きを疑ふ。損之云ふ、卦畫は七八、爻は九六を稱す、と。」

(20) 筆錄　『楊公筆錄』「楊蜀中鄉先生也。博學善稱說。余嘗疑易用九六。而無七八數。楊損之云。卦畫七八。爻稱九六。其言甚簡。細詳之如有理。」

乾之策二百一十有六。坤之策百四十有四。亦是擧九六。以該七八也。朱子謂七八之合。亦三百有六十也。

〔原注〕乾遇七則一百六十八。坤遇八則一百九十二。

「乾[21]の策、二百一十有六、坤の策、百四十有四。」亦是れ九六を擧げて、以て七八を該ぬるなり。朱[22]子謂へらく、「七八の合も、亦三百有六十なり。」

〔原注〕乾の、七に遇ふは則ち一百六十八、坤の、八に遇ふは則ち一百九十二。[23][24]

(21) 乾之……有四　繫辭傳上「乾之策二百一十有六。坤之策百四十有四。凡三百有六十。當期之日。」韓注「陽爻六。一爻三十六策。六爻二百一十六策。陰爻六。一爻二十四策。六爻百四十四策。」

(22) 朱子　『易學啓蒙』卷三「此獨以老陰陽之策爲言者。以易用九六。不用七八也。然二少之合。亦三百有六十。」

(23) 一百六十八　二十八策の六倍。

(24) 一百九十二　三十二策の六倍。

卜筮

舜曰。官占惟先蔽志。昆命于元龜。詩曰。爰始爰謀。爰契我龜。洪範曰。謀及乃心。謀及卿士。謀及庶人。謀及卜筮。孔子之贊易也。亦曰。人謀鬼謀。

〔原注〕祖伊告紂。言格人元龜。亦先人後龜。

夫庶人至賤也。而猶在蓍龜之前。故盡人之明。而不能決。然後謀之鬼焉。故古人之於人事也。信而有功。於鬼也。嚴而不瀆。

〈五十三〉卜筮

舜曰く、「官占　惟れ先づ志を蔽め、昆、元龜に命ず。」『詩』に曰く、「爰に始め爰に謀り、爰に我が龜を契す。」洪範に曰く、「謀　乃の心に及ぼし、謀　卿士に及ぼし、謀　庶人に及ぼし、謀　卜筮に及ぼす。」孔子の、『易』に贊するや、亦曰く、「人謀り鬼謀る。」

〔原注〕祖伊　紂に告げて、「格人元龜」と言ふ。亦人を先にし龜を後にす。

夫れ庶人は至つて賤なり、而るに猶ほ蓍龜の前に在り。故に人の明を盡くして、決する能はず、然る後、之を鬼に謀

る。故に古人の、人事に於けるや、信にして功有り、鬼に於けるや、嚴にして瀆さず。

（1）舜　『尚書』大禹謨（僞古文）。
（2）詩　大雅、文王之什、緜。
（3）人謀鬼謀　繫辭傳下。
（4）格人元龜　『尚書』西伯戡黎（僞古文）。

子之必孝。臣之必忠。此不待卜而可知也。其所當爲。雖凶而不可避也。故曰。欲從靈氛之吉占兮。心猶豫而狐疑。又曰。用君之心。行君之意。龜策誠不能知此事。善哉。屈子之言。其聖人之徒歟。

子の、孝を必とし、臣の、忠を必とする、此れトを待たずして知るべきなり。其の當に爲すべき所は、凶なりと雖も而れども避くべからざるなり。故に曰く、「(5)靈氛の吉占に從はんと欲するも、心猶豫して狐疑す。」又曰く、「(6)君の心を用ひ、君の意を行へ。龜策は誠に此の事を知る能はず。」善きかな、屈子の言、其れ聖人の徒か。

（5）靈氛……狐疑　『楚辭』離騷。
（6）用君……此事　『楚辭』卜居。一に「此」字無し。

卜居屈原自作。設爲問荅。以見此心非鬼神吉凶之所得而移耳。王逸序乃曰。心迷意惑。不知所爲。往至太卜之家。決

之蓍龜。冀聞異策。以定嫌疑。則與屈子之旨大相背戾矣。洪興祖補注曰。此篇上句皆原所從。下句皆原所去。時之人去其所當從。從其所當去。其所謂吉。乃原所謂凶也。可謂得屈子之心者矣。

〔楊氏曰〕漢以前注。止据文生義。王叔師序漁父。便謂實有其人。此不足怪也。

卜居は屈原自ら作り、問荅を設け爲して、以て此の心　鬼神吉凶の得て移す所に非ざるを見すのみ。王逸[7]の序に乃ち曰く、「心迷ひ意惑ひ、爲す所を知らず。往きて太卜の家に至り、之を蓍龜に決す。異策を聞きて、以て嫌疑を定めんことを冀ふ。」則ち屈子の旨と大いに相背戻す。洪興祖[8]の補注に曰く、「此篇、上句は皆、原の從ふ所、下句は皆、原の去る所。時の人　其の當に從ふべき所を去り、其の當に去るべき所に從ふ。其の所謂吉は、乃ち原の所謂凶なり。」屈子の心を得たる者と謂ふべし。

〔楊氏[9]曰く〕漢以前の注、止だ文に据り義を生ず。王叔師　漁父に序し、便ち謂へらく、實に其の人有り、と。此れ怪しむに足らざるなり。

(7) 王逸序　引用に省略有り。

(8) 洪興祖補注　引用に省略有り。

(9) 楊氏　楊名宁。出典未詳。

禮記少儀。問卜筮。曰。義與志與。義則可問。志則否。子孝臣忠義也。違害就利志也。卜筮者。先王所以教人去利懷

仁義也。

『禮記』少儀に、「卜筮を問ふに、曰く、義か志か、と。義なれば則ち問ふべく、志なれば則ち否(しから)ず。」子孝、臣忠なるは義なり、害(10)を違け利に就くは志なり。卜筮は、先王の、人を教へて利(11)を去り仁義を懐かしむる所以なり。

(10) 違害就利　『呉子』圖國「謀者。所以違害就利。」

(11) 去利懐仁義　『孟子』告子下「是君臣父子兄弟。去利懐仁義以相接也。」

石駘仲卒。無適子。有庶子六人。卜所以爲後者。曰。沐浴佩玉則兆。五人者皆沐浴佩玉。石祁子曰。孰有執親之喪。而沐浴佩玉者乎。不沐浴佩玉。石祁子兆。衛人以龜爲有知也。南蒯將叛。枚筮之。遇坤之比。曰黄裳元吉。子服惠伯曰。忠信之事則可。不然必敗。外彊内温。忠也。和以率貞。信也。故曰。黄裳元吉。黄中之色也。裳下之飾也。元善之長也。中不忠。不得其色。下不共。不得其飾。事不善。不得其極。且夫易不可以占險。猶有闕也。筮雖吉未也。南蒯果敗。是以嚴君平之卜筮也。與人子言依於孝。與人弟言依於順。與人臣言依於忠。而高允亦有筮者當依附爻象。勸以忠孝之論。其知卜筮之旨矣。

(12) 石駘仲　卒す。適子無く、庶子六人有り。後と爲す所以の者を卜す。曰く、「沐浴して玉を佩ぶれば則ち兆あらん。」

五人の者皆、沐浴して玉を佩ぶ。石祁子曰く、「孰か親の喪を執りて、沐浴して玉を佩ぶる者有らんや。」沐浴して玉を佩びず。石祁子　兆[13]あり。衞人　龜を以て知有りと爲すなり。南蒯[14]將に叛かんとして、之を枚筮す。坤の、比に之くに遇ふ。曰く、「黃裳[15]元吉。」子服惠伯曰く、「忠信の事は則ち可なり。然らずんば必ず敗れん。外彊にして內温なるは、忠なり。和以て貞に率ふは、信なり。故に曰く、黃裳にして元なれば吉、と。黃は中の色なり。裳は下の飾なり。元は善の長なり。中　忠ならざれば、其の色を得ず。下　共ならざれば、其の飾を得ず。事　善ならざれば、其の極を得ず。且つ夫れ易は以て險を占ふべからず。猶ほ闕くる有らば、筮　吉と雖も未だしなり。」南蒯果して敗る。是を以て嚴[16]君平の卜筮するや、人子とは孝に依るを言ひ、人弟とは順に依るを言ひ、人臣とは忠に依るを言ふ。而して高[17]允も亦筮者當に爻象に依附し、勸むるに忠孝を以てすべしの論有り。其れ卜筮の旨を知れり。

(12) 石駘……知也　『禮記』檀弓下。
(13) 兆　原據は、この上に「得」字有り。
(14) 南蒯……果敗　『左傳』昭公十二年。引用に省略有り。
(15) 黃裳元吉　坤卦六五爻辭。
(16) 嚴君……於忠　『漢書』王貢兩龔鮑傳序。
(17) 高允……之論　『北史』樂平王丕傳「丕之薨及日者董道秀之死也。高允遂著筮論曰。昔明元末。起白臺。其高二十餘丈。樂平王嘗夢登其上。四望無所見。王以問日者董道秀。筮之。曰。大吉。王默而有喜色。後事發。王遂憂死。而道秀棄市。道秀若推六爻以對王曰。易稱亢龍有悔。窮高曰亢。高而無人。不爲善也。夫如是。則上寧於王。下保於己。福祿方至。豈有禍哉。今舍於本而從其末。咎釁之至。不亦宜乎。」申鑒。或問卜筮。曰。德斯益。否斯損。曰。何謂也。吉而濟。凶而救之謂德。吉而恃。凶而怠之謂損。

『申鑒』[18]に、「或(あるひと)卜筮を問ふ。曰く、徳あれば斯に益し、否ざれば斯に損す、と。曰く、何の謂ぞや、と。吉にして濟ひ、凶にして救ふを之れ徳と謂ひ、吉にして恃み、凶にして怠るを之れ損と謂ふ、と。」

(18) 申鑒　俗嫌篇。

君子將有爲也。將有行也。問焉而以言。其受命也如響。告其爲也。告其行也。死生有命。富貴在天。若是則無可爲也。無可行也。不當問。問亦不告也。易以前民用也。非以爲人前知也。求前知。非聖人之道也。是以少儀之訓曰。毋測未至。

君子[19]將に爲す有らんとするや、將に行く有らんとするや、焉(これ)に問ひて以て言ふ。其の、命を受くるや響の如し。其の爲すを告ぐるなり、其の行くを告ぐるなり。死生[20]　命有り、富貴　天に在り。是の若くんば則ち爲すべき無きなり、行くべき無きなり。當に問ふべからず。問ふも亦告げざるなり。易は以[21]て民用に前だつなり。以て人の爲に前知するに非ざるなり。前知を求むるは、聖人の道に非ざるなり。是を以て少儀[22]の訓に曰く、「未だ至らざるを測る毋れ。」

(19) 君子……如響　繫辭傳上。

(20) 死生……在天　『論語』顔淵。

(21) 以前民用　繫辭傳上。

(22) 少儀　『禮記』少儀。

郭璞嘗過顏含。欲爲之筮。含曰。年在天。位在人。修己而天不與者。命也。守道而人不知者。性也。自有性命。無勞蓍龜。

(23)郭璞嘗て顏含に過り、之が爲に筮せんと欲す。含曰く、「年は天に在り、位は人に在り。己を修むるも天與せざる者は、命なり。道を守るも人知らざる者は、性なり。自ら性命有り、蓍龜を勞する無し。」

(23) 郭璞……蓍龜　『晉書』孝友、顏含傳。原據は、「郭璞嘗　過顏含」を「郭璞嘗遇含」に作る。

文中子。子謂北山黃公善醫。先寢食而後鍼藥。汾陰侯生善筮。先人事而後說卦。

『(24)文中子』に、「子謂ふ、北山の黃公　醫を善くす。寢食を先にして鍼藥を後にす。汾陰の侯生　筮を善くす。人事を先にして卦を說くを後にす、と。」

(24) 文中子　魏相篇。

金史方伎傳序曰。古之爲術。以吉凶導人而爲善。後世術者。或以休咎導人而爲不善。

『金史』方伎傳序に曰く、「古の、術を爲すは、吉凶を以て人を導きて善を爲さしむ。後世の術者、或は休咎を以て人を導きて不善を爲さしむ。」